

平成15年度
長崎県の児童生徒基礎学力調査
報告書

平成16年7月

長崎県教育委員会

はじめに

昨年10月の中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策」を受け、文部科学省は、同年12月に学習指導要領の一部改正を行うとともに、「学力向上アクションプラン」など、「確かな学力」の育成を図る方策の充実・改善に係る諸施策を展開しております。

本県においても、重点施策に「学力の充実・向上対策」を掲げ、平成14年度から本県独自の「基礎学力調査」を実施し、学習指導上の問題点を明確にし、各学校の教育課程の編成・実施及び学習指導の改善に役立ててまいりました。

平成15年度の調査結果は、「長崎県の基礎学力調査結果（概要版）」とともに、この「長崎県の基礎学力調査報告書」にまとめました。本報告書には、概要版で示した調査データをもとに「提言」、「学習意識調査及び基礎学力調査結果の分析・考察・改善点」を掲載しています。

今回の調査の結果、約8割の児童生徒が「授業がわかった時、やる気が出る」と答え、さらに、約7割の児童生徒が「やればできる」と考えていることがわかりました。一方、「やる気」や「やればできる」という思いが、学力の定着や家庭学習の習慣化に必ずしも結びついていない実態も明らかになっています。「わかる授業づくり」に努めるとともに、「わかった」を「できた」、「使ってみた」、「役立った」につなげる指導や仕組みづくりの必要性を調査結果が物語っています。

また、「個に応じた指導」、「学習規律の確立」など、改善すべき課題も明らかになりました。

県教育委員会といたしましては、調査結果をもとに「確かな学力の定着・向上」を図るための諸施策の改善・充実に引き続き努めてまいり所存です。

各学校においては、概要版並びに報告書を全ての教職員が十分に熟読した上で、自校の学力実態の把握に努めるとともに、これまでの実践の再点検に取り組む必要があります。そして、各学校独自の学力向上プランを策定し、その実践化を図っていただき、一人ひとりの児童生徒に「確かな学力」を定着させることを強く期待しています。

平成16年7月

長崎県教育委員会
教育長 立石 暁

目 次

第1部	調査結果のまとめの構成について	1
第2部	提言	2
第3部	調査結果の分析，考察及び指導上の改善点	5
	学習意識調査	6
	改善の視点1	6
	改善の視点2	10
	改善の視点3	12
	改善の視点4	14
	改善の視点5	16
	基礎学力調査	18
1	小学校国語	18
	(1)部(領域)別経年比較	18
	(2)部(領域)別経年比較分析及び考察	19
	(3)正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点	20
2	小学校算数	24
	(1)部(領域)別経年比較	24
	(2)部(領域)別経年比較分析及び考察	25
	(3)正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点	26
3	中学校国語	30
	(1)部(領域)別経年比較	30
	(2)部(領域)別経年比較分析及び考察	31
	(3)正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点	32
4	中学校数学	36
	(1)部(領域)別経年比較	36
	(2)部(領域)別経年比較分析及び考察	37
	(3)正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点	38
5	中学校英語	44
	(1)部(領域)別経年比較	44
	(2)部(領域)別経年比較分析及び考察	45
	(3)正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点	46

第1部 調査結果のまとめの構成について

【基礎学力調査結果】



概要版

(平成16年5月発行)

“調査結果の概要”
(データ及び客観的説明)

- 調査の概要
- 集計にあたって
- 結果の概要
 - ・ 各教科部(領域)別平均点一覧
 - ・ 各教科
「出題について」
「部(領域)別平均点及び
度数分布」
「設問別正答率」
「設問別結果概要」
 - ・ 学習意識質問別回答割合と分析
- 市町村別調査結果等一覧表
- 問題及び採点基準表等

報告書

(平成16年7月発行)

“提言及び分析, 考察と
指導上の改善点”

- 提言
- 分析, 考察及び指導上の改善点
 - ・ 意識と学力とのクロス集計結果
に基づく「5つの改善の視点」
 - ・ 各教科
「部(領域)別経年比較」
「部(領域)別経年比較分析及び
考察」
「正答率の低い設問に関する
分析・考察, 指導上の改善点」

第2部 提言

平成15年度「長崎県の児童生徒基礎学力調査」の結果を踏まえ、指導の改善策を『提言』としてまとめました。

1 「わかる授業」づくりと「学習意欲」の喚起

「わかる授業」づくりと自主的な学び方を学ばせる視点から授業改善に取り組むとともに、「質問タイム」の設定など子どもたちの意欲と主体性をはぐくむ“学び”の環境づくりに努めましょう。

2 「個に応じた指導」の一層の充実

一人一人の学習状況を的確に把握し、学習形態等の工夫により個に応じた指導体制を確立し、教科書の内容の習得など基礎・基本の確実な定着及び発展的・補充的な学習の指導に努めましょう。

3 「学習規律」の確立

「人の話を最後まで聞く、学習用具を整える、宿題をする」など基本的な学習規律を確立させることに努めましょう。

4 「努力と賞賛・励まし」の教育活動の展開

“やればできる”ことが実感できる「努力と賞賛・励まし」の教育活動を学校全体で繰り広げましょう。

5 「目的意識」の育成

生き方について多様な価値観があることに気付かせ、学びの意味や将来の在り方を考えさせる指導を一層充実させましょう。

6 「授業と連動した家庭学習」の習慣形成

授業と家庭学習との有機的な連動を図り、“自ら学ぶ習慣”を身に付けさせ、“できる喜び”を実感させる指導に努めましょう。



自校の学力実態を科学的・客観的に分析し、学力の向上につながるオリジナルプランを作成するとともに、学校全体で組織的・継続的に取り組みましょう。

学力向上オリジナルプランを考えるにあたって、以下の観点例を参考にしてください。

校長・教頭を中心に学校全体で取り組むこと

- 「指導と評価の一体化」とそれを生かした授業改善の視点に立ち、子どもの実態を踏まえた教育課程や指導計画の工夫・改善に努めていますか。
- 子どもの学力や教師の指導力の向上を強く意識した授業研究や教材研究、教材開発など、組織的な校内研修に取り組んでいますか。
- 学年部会や教科部会などで共通理解を図りながら、学力の向上に系統的・組織的に取り組んでいますか。
- 全教育活動を通じ、「聞く、話す、読む、書く」などの基礎的学習能力の育成に系統的・組織的に取り組んでいますか。
- 帯時間などを活用した各種学習タイムや朝自習時間を計画的・組織的に実施するなど「わかった」を「できた」にする家庭学習を含めた学力定着プロセスの構築に努めていますか。

学級担任・教科担任を中心に取り組むこと

- 体験的活動を取り入れるなどして、意欲を喚起させ、子どもが自らの力で学習内容を理解・体得できるような授業づくりに努めていますか。
- 「わかった」「できた」「使ってみた」「役立った」の四つの段階を体験させながら、毎時間の授業の中で個々の理解度を把握するとともに、その結果をきめ細かな指導に生かしていますか。
- 教科書の内容の習得を大切にし、基礎・基本の確実な定着に努めていますか。
- 「人の話を最後まで聞く、学習用具を整える、宿題をする」などの学習姿勢や学習規律の確立を図っていますか。

家庭と連携して取り組むこと

- 授業の内容と家庭学習の内容とを有機的に関連付け、基礎・基本の確実な定着に努めていますか。
- 家庭学習の内容が発達段階や個の理解に応じたものになっていますか。
- 家庭学習の内容や方法を具体的に指示・指導したり、点検・評価したりして、意欲を高揚・持続させることに努めていますか。

各教科の【指導上の改善点】のまとめ

小学校国語

- 1 「わかった」「できた」「使ってみた」「役立った」の四つの段階を押さえて、生きて働く国語の力を身に付けさせましょう。
- 2 言語事項については、繰り返し学習や他の領域での活用を通して定着を図りましょう。
- 3 読書習慣の定着や掲示の工夫などに取り組み、正しい文字や美しい言葉に触れさせる言語環境を整えましょう。

小学校算数

- 1 作業や操作など、ねらいに応じた算数的活動を取り入れ、数学的な見方や考え方を養いましょう。
- 2 答えの見当付けや検算などの場を多く設定し、結果についての見通しや確かめを、常に意識させましょう。
- 3 気付く楽しさ、わかる楽しさ、できる楽しさを味わわせる指導の工夫に努め、「算数は楽しい」や「算数は役立つ」を実感させましょう。

中学校国語

- 1 論理的思考力を高めるために、文章構成やキーワードに着目しながら分析的に読み解く力を身に付けさせる指導の充実を図りましょう。
- 2 言語事項の定着を図るために、3領域と有機的に関連させるとともに、家庭学習との連動を図り、学習状況を把握しながら繰り返し学習させましょう。
- 3 読書の啓発に努め、音読や書く活動を通して言語感覚を磨き、言葉に対する興味・関心を深めさせましょう。

中学校数学

- 1 身近な事象を題材にしたり、日常生活の場面に数学を活用したりして、数学が役立つことを味わわせ、数学への関心・意欲を高めましょう。
- 2 作業・観察・実験・操作などの数学的活動を多く取り入れて、数学的な見方や考え方を養いましょう。
- 3 計算技能の定着を図るために、定期的に宿題を出しましょう。学習中の内容だけでなく、既習の学習内容の宿題も出しましょう。

中学校英語

- 1 基本的な言語材料の定着を図りながら、「単語から文、文から文章」など表現力を高めるための段階的指導に努めましょう。
- 2 「音読」・「暗唱」指導の一層の充実を図りましょう。
- 3 「スキットづくり」を活用し、音声言語能力と文字言語能力の育成を図りましょう。

第 3 部

調査結果の分析，考察及び指導上の改善点

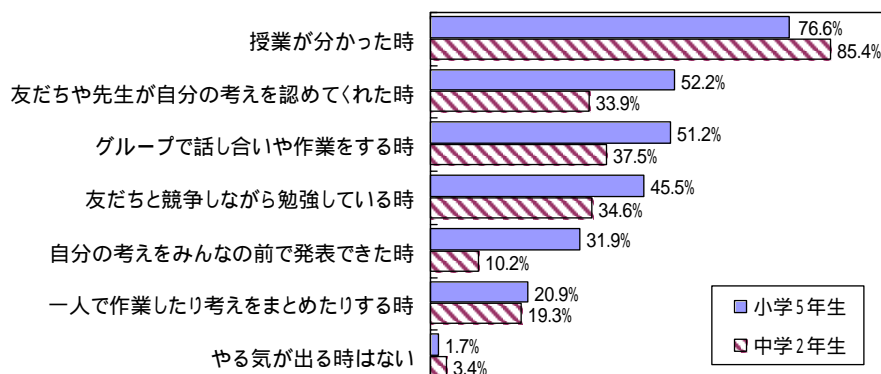
学習意識調査

改善の視点1 わかる授業づくりと学習意欲の喚起

実態1 わかる授業が学習意欲を喚起する。

(1) やる気が出る時

【設問1】 授業中、あなたがやる気が出るのはどんな時ですか。当てはまるものはすべて選んで、() に をつけてください。

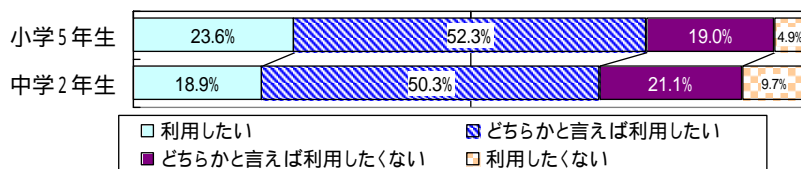


小中学生ともに、「授業が分かった時」が圧倒的に多く、特に中学生では2位以下との差が大きい。
小学生では、「自分の考えを認めてくれた時」や「グループで話し合いや作業をする時」などでも高い傾向にある。

実態2 多くの機会をやる気に結び付けることができる児童生徒は、学習姿勢が積極的で、学力が高い傾向にある。

(2) 質問タイムの利用希望

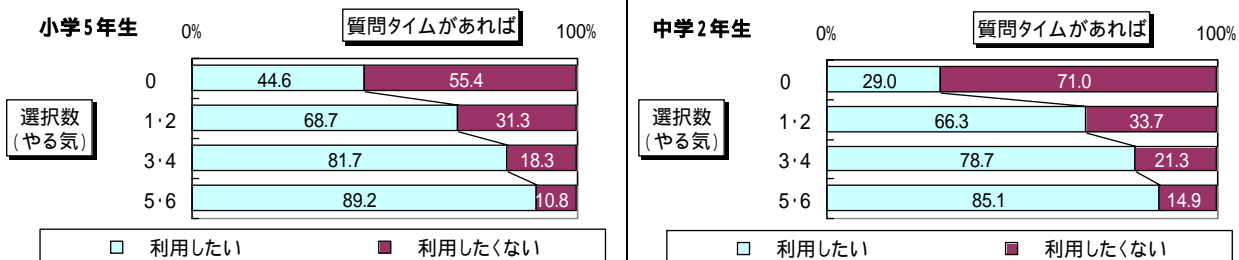
【設問2】 授業時間のほかに質問タイム（質問のために決められた時間）のようなものがあれば、利用したいと思いますか。次の中から一つだけ選んで、 に番号を書いてください。



「利用したい」と「どちらかと言えば利用したい」とを合わせると、小学生では約8割、中学生では約7割である。質問できる環境を望んでいる児童生徒が多い。

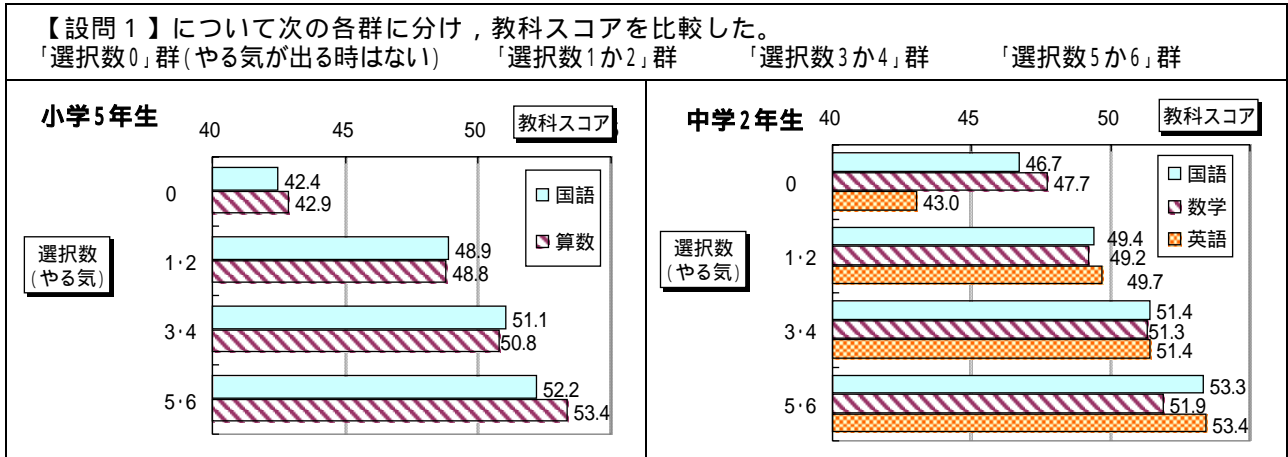
(3) 「やる気が出る時」の選択数と質問タイム利用希望との関係

【設問1】と【設問2】について次の各群に分け、クロス集計をし、割合を比較した。
設問1... 「選択数0」群(やる気が出る時はない) 「選択数1か2」群 「選択数3か4」群 「選択数5か6」群
設問2... 「利用したい」(どちらかと言えばを含む)群 「利用したくない」(どちらかと言えばを含む)群



多くの機会をやる気に結び付けることができる児童生徒は、質問タイムを利用しようとする割合が高い。「やる気が出る時はない」とする児童生徒は、質問タイムを利用しようとする割合が低い。

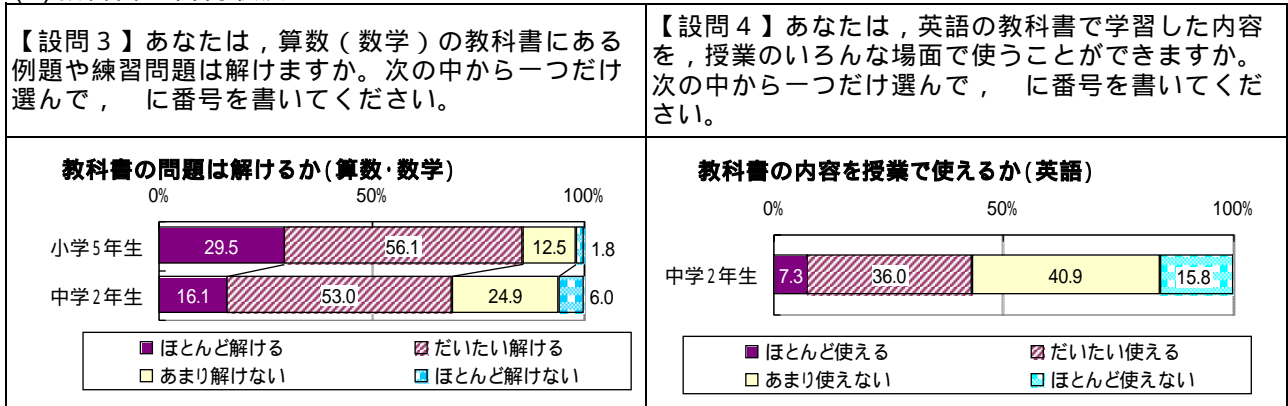
(4) 「やる気が出る時」の選択数と教科スコア（平均偏差値）との関係



多くの機会をやる気に結び付けることができる児童生徒は，校種，教科を問わず教科スコアが高い。

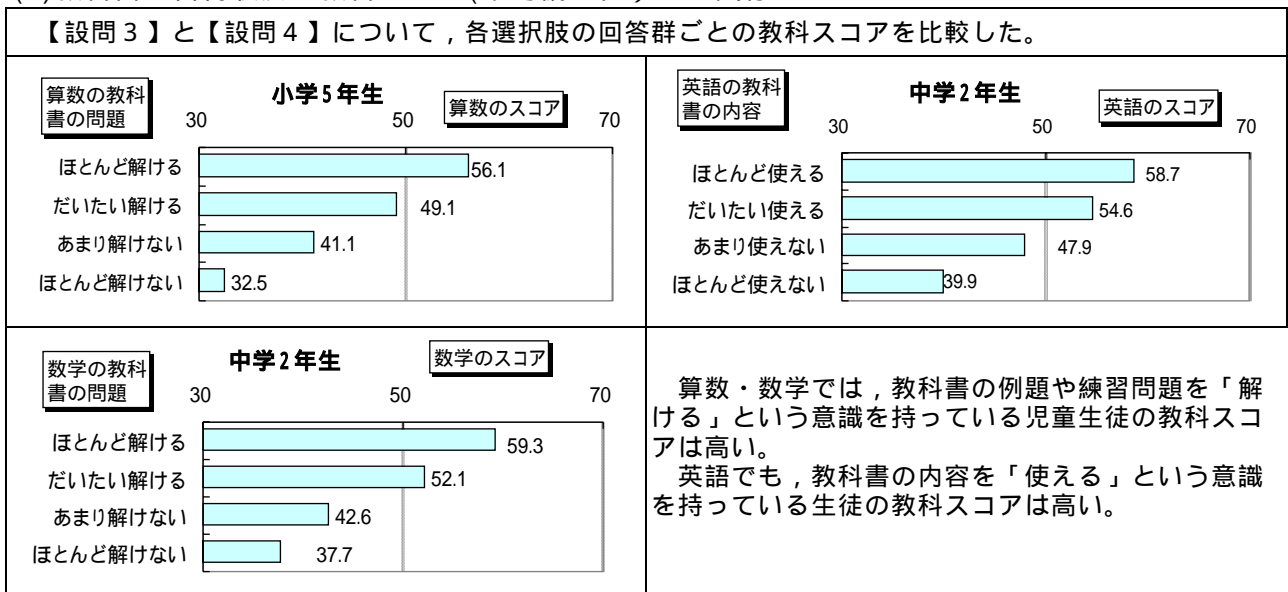
実態3 教科書の内容の習得は，学力定着に直結している。

(5)教科書の習得状況



算数・数学は，「ほとんど解ける」と「だいたい解ける」を合わせると小学生で約9割，中学生では約7割になる。英語は，過半数の生徒が，教科書の内容を授業で「使えない」という意識を持っている。

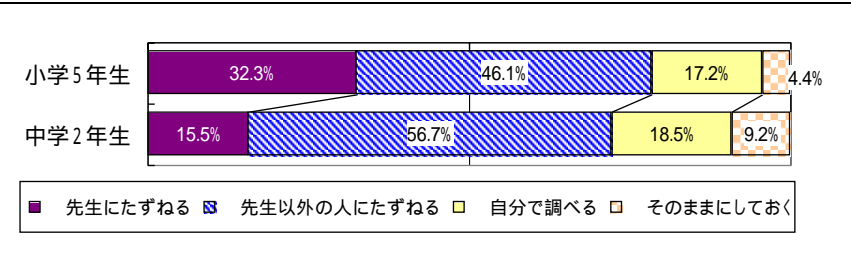
(6)教科書の習得状況と教科スコア（平均偏差値）との関係



実態4 わからない時、「先生にたずねる」以外の方法をとる児童生徒が多い。

(7) わからない時どうするか

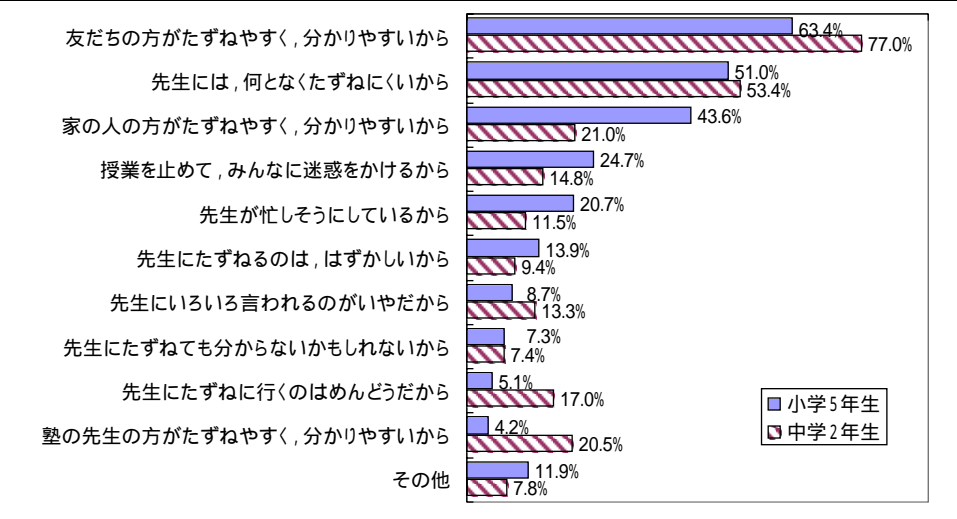
【設問5】 授業の内容でわからないことがあった時、どうすることが一番多いですか。次の中から一つだけ選んで、()に番号を書いてください。



小中学生ともに「先生以外の人にたずねる」が最も高い割合を示している。特に中学生になるとその傾向は強くなっている。
一方、「そのままにしておく」割合は、小学生よりも中学生が高い。

(8) 先生にたずねない理由

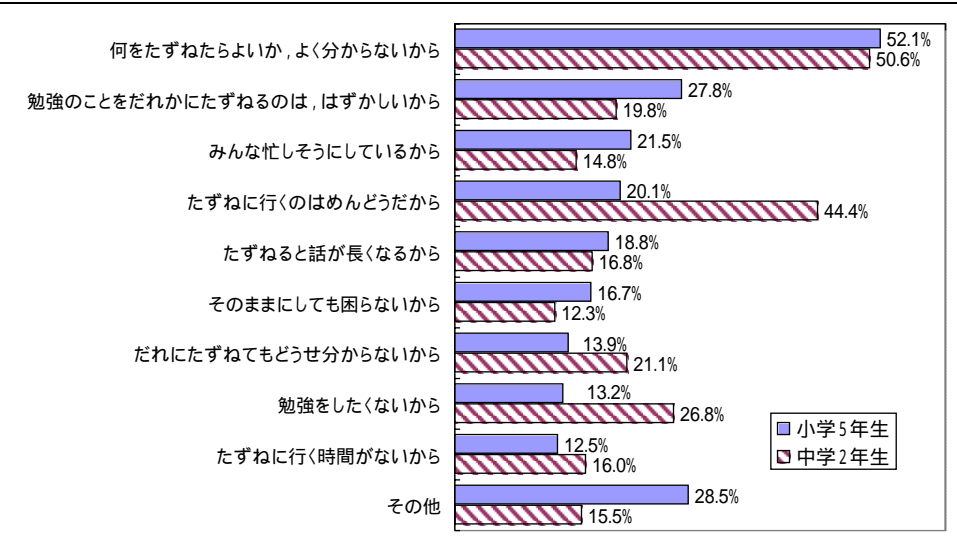
【設問6】 上の【設問5】で「先生以外の人にたずねる」と答えた人は、なぜ、先生にたずねないのですか。その理由を次の中から三つまで選んで、()に をつけてください。



小中学生ともに、5割以上の児童生徒が「先生には、何となくたずねにくいから」と回答している。
一方、最も回答の割合が高いのは、「友だちの方がたずねやすく、分かりやすいから」である。

(9) そのままにしておく理由

【設問7】 上の【設問5】で「そのままにしておく」と答えた人は、なぜ、そのままにしておくのですか。その理由を次の中から三つまで選んで、()に をつけてください。



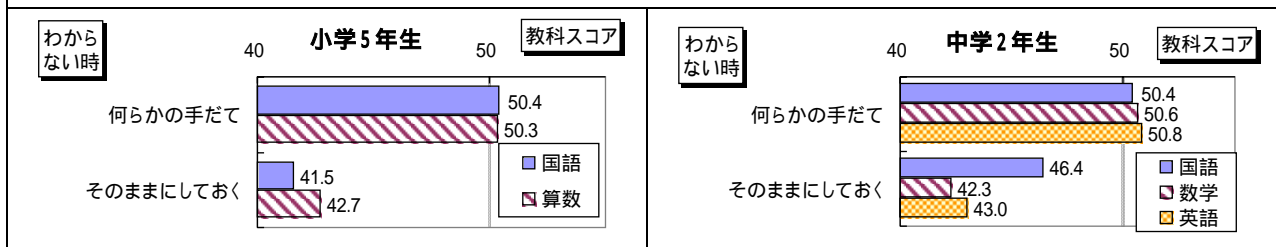
小中学生ともに「何をたずねたらよいか、よく分からないから」とする児童生徒の割合が最も高く5割を超えている。
2番目に多い理由は、小学生は「はずかしいから」、中学生は「めんどうだから」である。

実態5 わからない時、「そのままにしておく」児童生徒は学力が低い傾向にある。

(10) 「何らかの手だてを講じる」児童生徒と「そのままにしておく」児童生徒との学力の違い

【設問5】について次の各群に分け、教科スコアを比較した。

「何らかの手だてを講じる」(先生に尋ねる + 先生以外の人に尋ねる + 自分で調べる)群
 「そのままにしておく」群

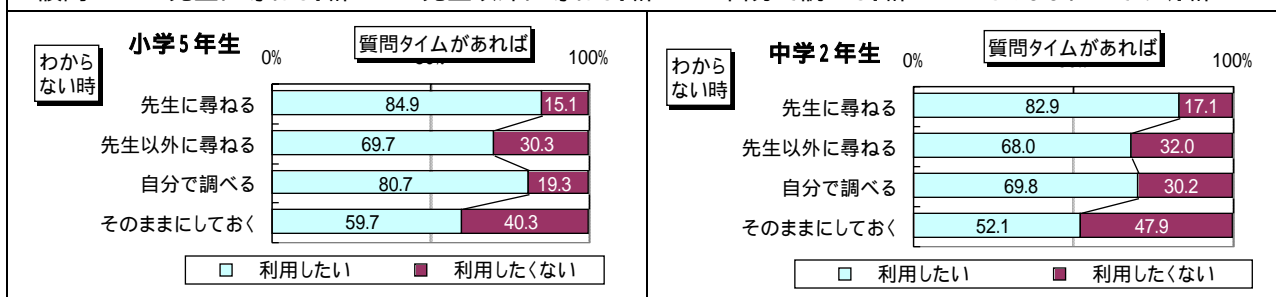


小中学生ともに「何らかの手だてを講じる」児童生徒と「そのままにしておく」児童生徒との教科スコアの差は大きい。授業が十分に理解できない児童生徒の把握に努め、適切な助言・指導が必要である。

(11) 「わからない時にどうするか」の各選択群ごとの質問タイムの利用希望割合

【設問2】(P6参照)と【設問5】について次の各群に分け、クロス集計をし、割合を比較した。

設問2... 「利用したい」(どちらかと言えばを含む)群 「利用したくない」(どちらかと言えばを含む)群
 設問5... 「先生に尋ねる」群 「先生以外に尋ねる」群 「自分で調べる」群 「そのままにしておく」群



「そのままにしておく」児童生徒の中で、「質問タイム」を利用したいと答えている児童生徒が5割を超えていることは注目に値する。

考 察

多くの機会をやる気に結びつけることができる児童生徒は学力が高い傾向にある。様々な学習形態を工夫し、児童生徒の意欲を引き出すことが大切である。中でも、その意欲を引き出す一番の要素は「わかる授業」の実践である。

教科書の習得は、学力定着に直結している。「教科書の学習」「自発的な学習」「基礎的・基本的な内容の定着」という、教科書を基盤とした学習が大切である。

わからない時に、「先生に尋ねる」以外の方法をとる児童生徒が多い。また、わからない時に、「そのままにしておく」児童生徒は学力が低い傾向にある。一人一人の習得状況を的確に把握し、尋ねやすい学習形態を工夫したり、質問タイムの導入など場の設定を工夫したりして、一人一人のニーズに即した学習を展開することが大切である。

これらのことに留意することで、「わからない悩み」が「わかる喜び」に転化し、それが「できた」「使ってみた、役立った」という実感を伴う喜びに発展する。また、この望ましい学習サイクルの形成には、信頼関係に基づく学級づくりが不可欠である。

提言 1, 2 へ

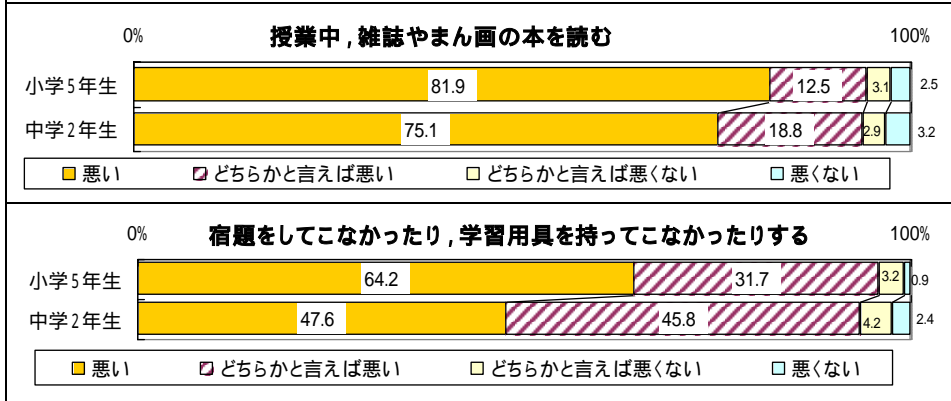
改善の視点2 学習規律の確立

実態1 学習における規範意識が高い児童生徒は、学習姿勢が積極的で学力が高い傾向にある。

(1) 学習における規範意識

学習規律を守るために必要と思われる児童生徒の規範意識を調べるため、二つの項目についてどう思うかを尋ねた。（ここでは、「悪い」と思う者を「その項目における規範意識が高い傾向にある」ととらえた。）

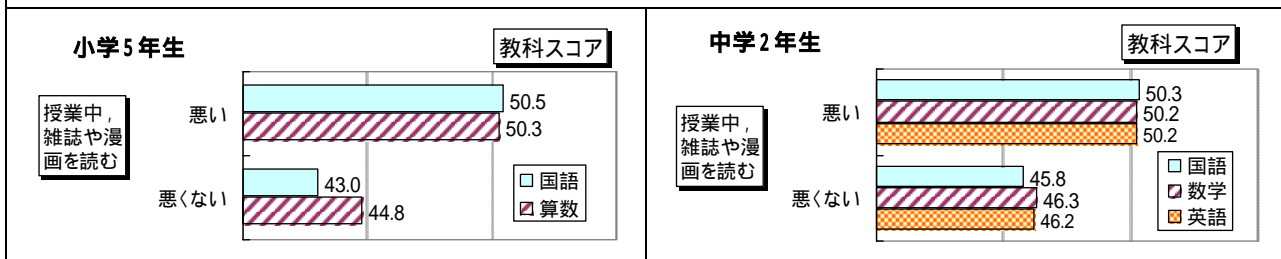
【設問8】 あなたは、次のようなことについてどう思いますか。一つだけ選んで に番号を書いてください。



いずれの項目についても、小中学生ともに「悪い」（どちらかと言えばを含む）という意識を持っている児童生徒の割合は9割を超えている。児童生徒の学習における規範意識は高い傾向にある。

(2) 学習における規範意識と教科スコア（平均偏差値）との関係

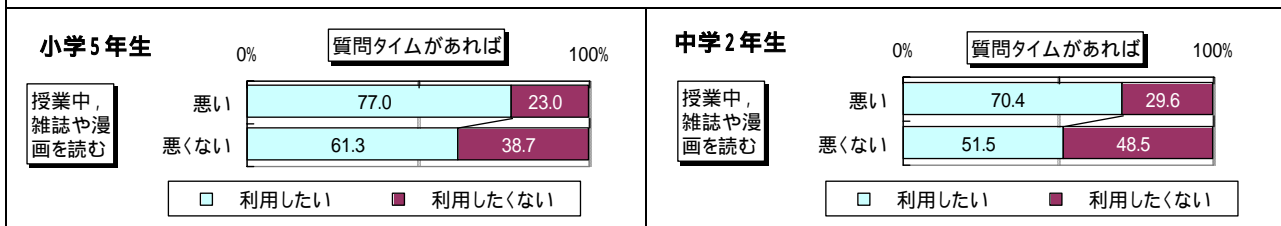
【設問8】について次の各群に分け、教科スコアを比較した。
 「悪い」（どちらかと言えばを含む）群 「悪くない」（どちらかと言えばを含む）群



小中学生ともに、どの教科も「悪い」と回答した群（規範意識が高い傾向）の教科スコアが高い。「宿題をしてこなかったり、学習用具を持ってこなかったりする」についても、同じ傾向にある。規範意識が学力向上に影響していることがわかる。

(3) 学習における規範意識と質問タイム利用希望との関係

【設問8】と【設問2】(P6参照)について次の各群に分け、クロス集計をし、割合を出した。
 設問8... 「悪い」（どちらかと言えばを含む）群 「悪くない」（どちらかと言えばを含む）群
 設問2... 「利用したい」（どちらかと言えばを含む）群 「利用したくない」（どちらかと言えばを含む）群

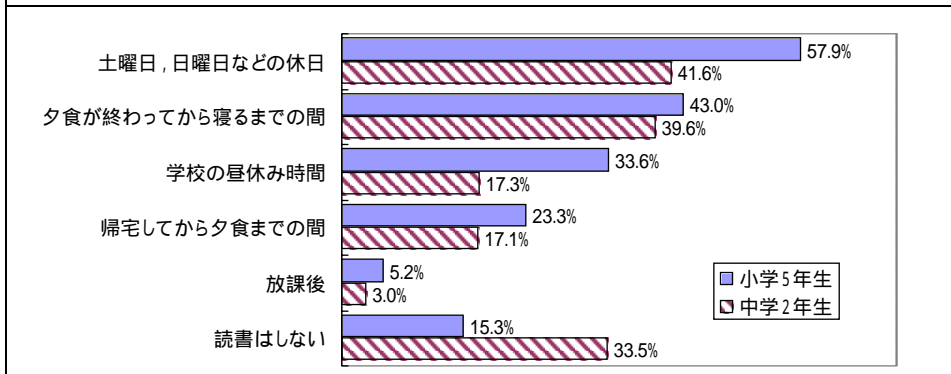


「悪い」と回答した群（規範意識が高い傾向）の「質問タイム利用希望割合」が高い。「宿題をしてこなかったり、学習用具を持ってこなかったりする」についても、同じ傾向にある。規範意識が、学習姿勢に影響していることがわかる。

実態2 学習における規範意識と読書習慣には関係がある。

(4)読書をする時

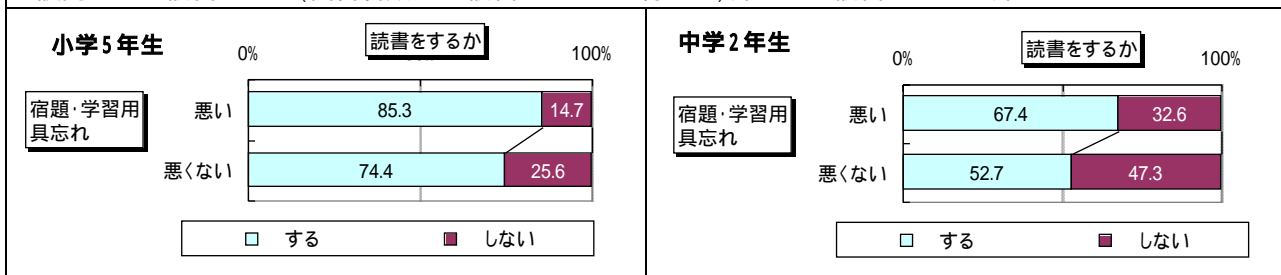
【設問9】 あなたは、どんな時に読書を読みますか。当てはまるものはすべて選んで、()に をつけてください。(教科書や参考書、まん画や雑誌はのぞきます。)



「土・日曜日などの休日」や「夕食が終わってから寝るまでの間」に読書をしている児童生徒が多い。
「読書はしない」児童生徒が、小学生で6～7人に一人、中学生で3人に一人いる。

(5)学習における規範意識と読書の有無との関係

【設問8】と【設問9】について次の各群に分け、クロス集計をし、割合を比較した。
設問8... 「悪い」(どちらかと言えばを含む)群 「悪くない」(どちらかと言えばを含む)群
設問9... 「読書をする」(回答者数から「読書はしない」を除いた)群 「読書はしない」群



「悪い」と回答した群(規範意識が高い傾向)の「読書をする」割合が高い。「授業中、雑誌やまん画の本を読む」についても、同じような傾向にある。規範意識と読書習慣とは、相互に影響し合っているのではないと思われる。

考 察

学習における規範意識が高い児童生徒は、学習に対して積極的で、学力が高い傾向にある。児童生徒と教師の信頼関係の下に、個々の規範意識を高め、基本的な学習規律(人の話を最後まで聞く、学習用具を整える、宿題をするなど)を確立することが学力向上には不可欠である。

学習における規範意識が高い児童生徒は、読書をする割合が高い傾向にある。学校の定時の読書時間はもちろん、日常生活の中での読書習慣が、個々の情緒の安定や集団の秩序の維持に効果があるのではないと思われる。

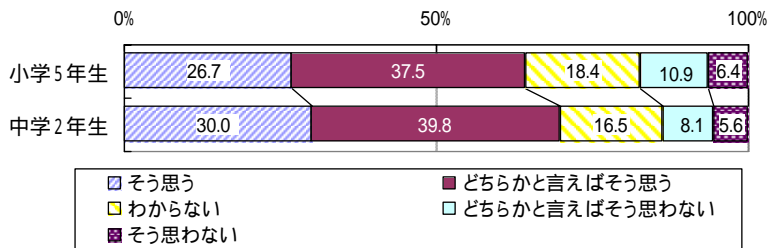
↓
提言3へ

改善の視点3 「やればできる」という自己肯定感の育成

実態1 「やればできる」という意識のある児童生徒は学習姿勢が積極的で、学力が高い傾向にある。

(1) 「やればできる」という意識

【設問10】 あなたは、「自分は、勉強すればよい成績をとれる」と思いますか。次の中から一つだけ選んで、 に番号を書いてください。



小中学生ともに、「勉強すればよい成績をとれる」ことについて肯定的（そう思う＋どちらかと言えばそう思う）な児童生徒が、「わからない」や否定的（どちらかと言えばそう思わない＋そう思わない）な児童生徒よりも多い。

(2) 「やればできる」という意識と質問タイム利用希望との関係

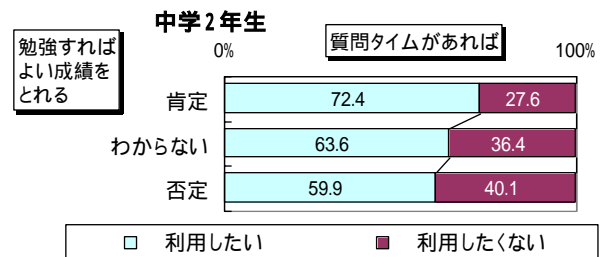
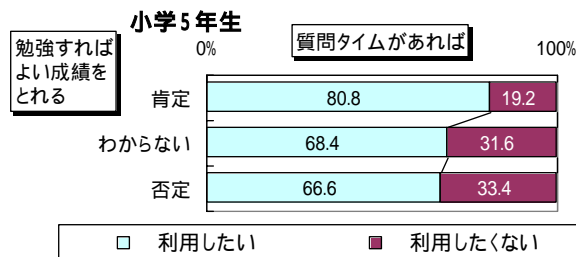
【設問10】 【設問2】（P 6 参照）について次の各群に分け、クロス集計をし、割合を比較した。

設問10... 「肯定」（そう思う＋どちらかと言えばそう思う）群 「わからない」群

「否定」（そう思わない＋どちらかと言えばそう思わない）群

設問2 ... 「利用したい」（どちらかと言えばを含む）群

「利用したくない」（どちらかと言えばを含む）群



肯定的な児童生徒の方が、質問タイムがあれば利用したいと考えている。このことは、小中学生とも同様の傾向にある。

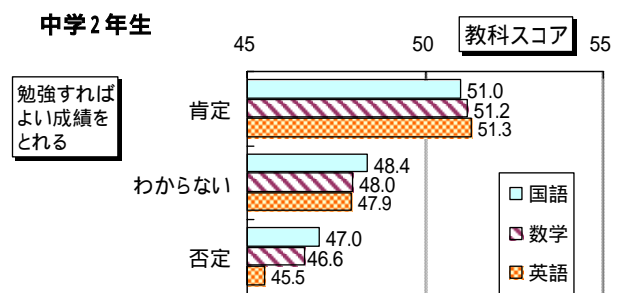
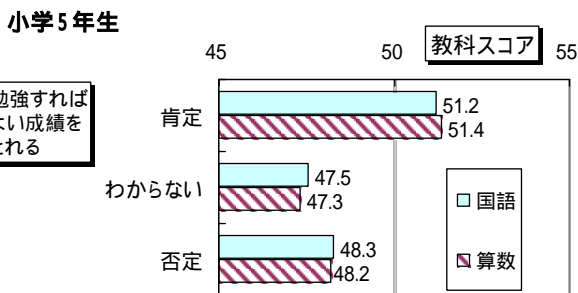
(3) 「やればできる」という意識と教科スコア（平均偏差値）との関係

【設問10】 について次の各群に分け、教科スコアを比較した。

「肯定」（そう思う＋どちらかと言えばそう思う）群

「わからない」群

「否定」（そう思わない＋どちらかと言えばそう思わない）群

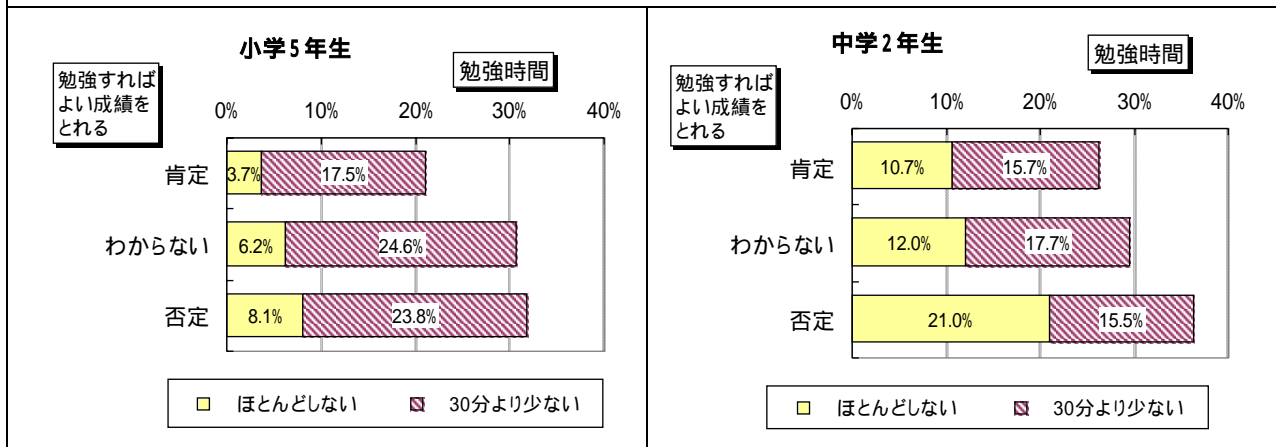


小中学生ともに、肯定的な児童生徒が、わからない児童生徒や否定的な児童生徒に比べて教科スコアが高い。自己肯定感が学力に影響していることがわかる。

実態2 「やればできる」という意識の低い児童生徒は、勉強時間が短い傾向にある。

(4) 「やればできる」という意識の各群と勉強時間が短い者との関係

【設問10】 【設問12】 (P16参照)について次の各群に分け、クロス集計をし、割合を比較した。
 設問10... 「肯定」(そう思う+どちらかと言えばそう思う)群 「わからない」群
 「否定」(そう思わない+どちらかと言えばそう思わない)群
 設問12... 家庭での勉強時間が「まったく、または、ほとんどしない」群
 家庭での勉強時間が「30分より少ない」群



否定的な児童生徒は、肯定的な児童生徒より家庭での勉強時間が短い(ほとんどしない+30分より少ない)割合が高い。ただし、肯定的な児童生徒においても、小学生では5人に一人、中学生では4人に一人が家庭での勉強時間が短い(ほとんどしない+30分より少ない)。

考 察

「やればできる」という意識のある児童生徒は、学習姿勢が積極的であり、学力が高い傾向にある。あらゆる教育活動の場で好ましい努力に対する賞賛の姿勢を常に持ち、児童生徒の自己肯定感を育成することが大切である。

「やればできる」という意識の低い児童生徒は、勉強時間が短い傾向にある。失敗や間違いの背景や理由をとらえる努力をするとともに、個々の児童生徒の指導に生かすことが望まれる。

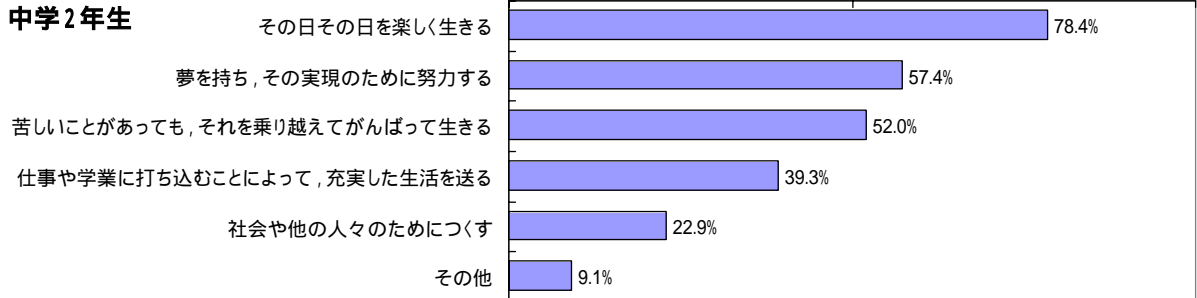
提言4へ

改善の視点4 目的意識の育成

実態1 将来の生き方として「その日その日の楽しさ」を希望する生徒が多い。

(1) 将来の生き方

【設問11】 人の生き方について、いろいろな考え方がありますが、あなたはどんな生き方を望みますか。当てはまるものはすべて選んで、()に をつけてください。



「その日その日を楽しく生きる」が約8割で群を抜いて多い。一方、「社会や他の人々のためにつくす」は約2割で極端に少ない。

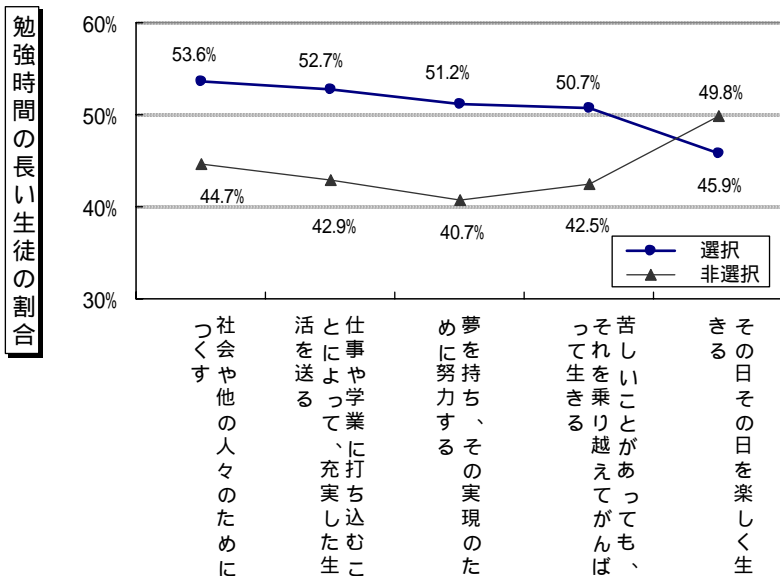
実態2 将来に対して多様な価値観を持っている生徒は学力が高い傾向にある。

(2) 将来の生き方と家庭での勉強時間との関係

【設問11】について各項目を次の各群に分け、それぞれの勉強時間が長い生徒（1時間以上... P16【設問12】参照）の割合を比較した。

「その項目を選択した」群

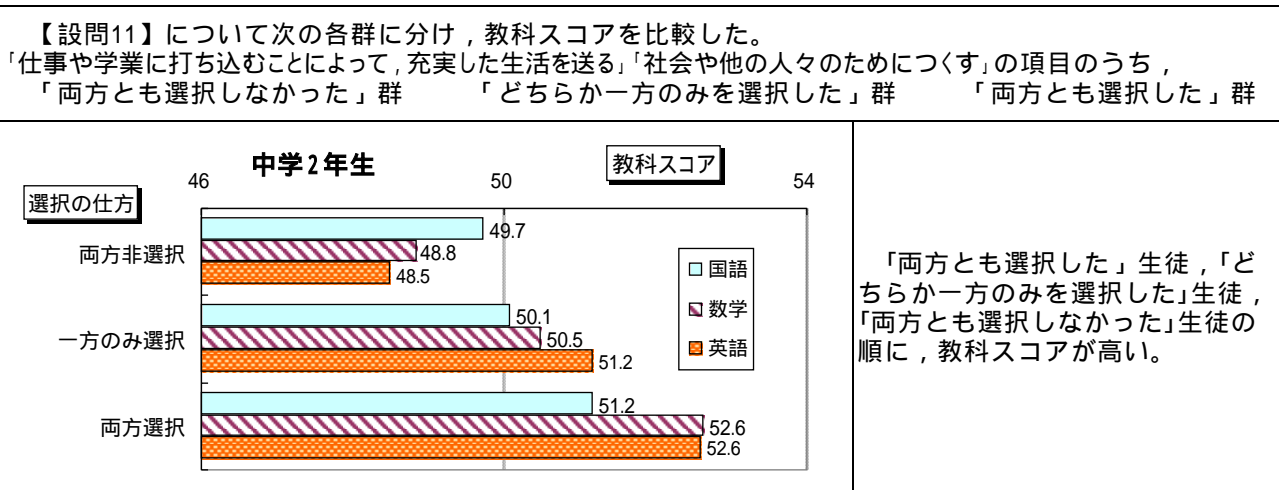
「その項目を選択しなかった」群



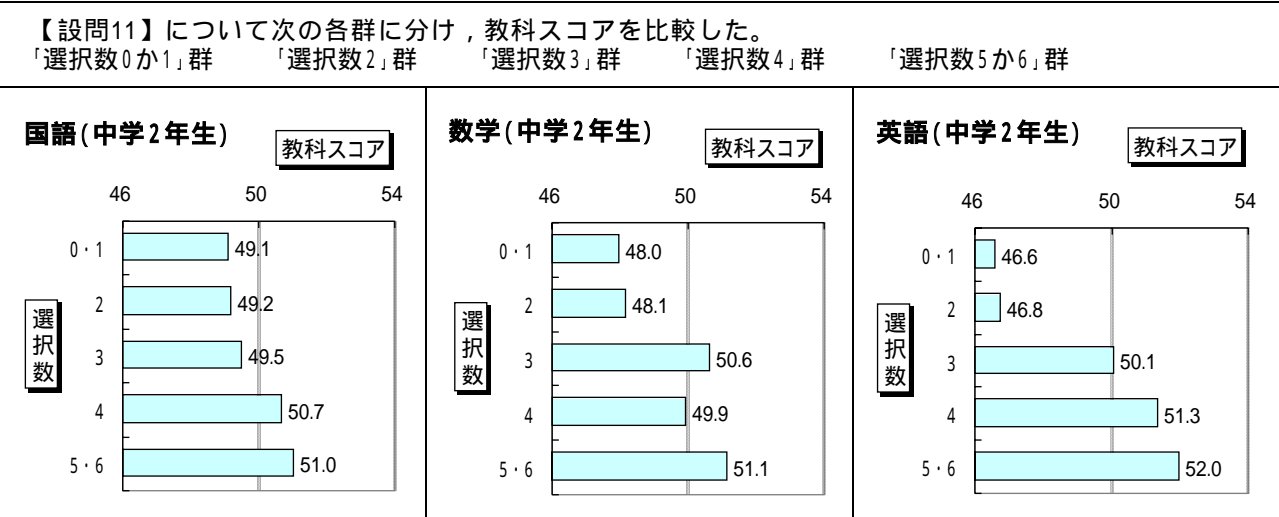
「社会や他の人々のためにつくす」、「仕事や学業に打ち込むことによって、充実した生活を送る」の順に、勉強時間が長い生徒（1時間以上）の割合が多い。

一方、「その日その日を楽しく生きる」が最も低く、選択群と非選択群の逆転現象が、唯一起っている。

(3) 「仕事や学業」「社会や人のため」の選択の仕方と教科スコア（平均偏差値）との関係



(4) 「将来の生き方」の選択数と教科スコア（平均偏差値）との関係



将来の生き方について，目的・価値観が多い群ほど教科スコアが高い。特に，英語についてその差が顕著である。

考 察

将来の生き方として「その日その日を楽しく生きる」を希望している生徒が多い。社会貢献やその使命感などの目的意識をもつ児童生徒の育成が必要である。

将来に対して多様な価値観を持っている生徒は，学力が高い傾向にある。多様な価値観に触れ，自分の生き方を見つめ直すような体験的活動を教育活動に組み込み，学ぶ意味の理解及び目的意識の高揚を図る必要がある。

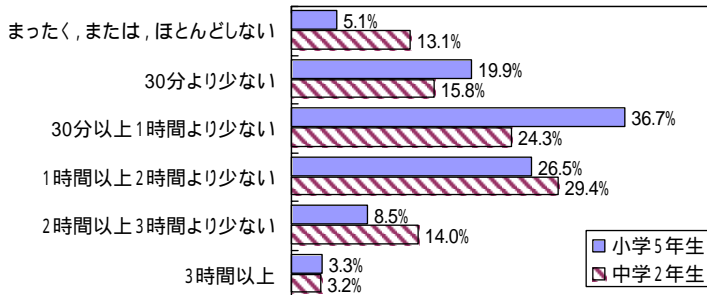


改善の視点5 授業と連動した家庭学習習慣の確立

実態1 勉強時間が長い児童生徒は、学習姿勢が積極的で学力が高い傾向にある。

(1) 家庭での勉強時間

【設問12】 あなたは、学校の授業のほか、1日にだいたいどのくらい勉強しますか。次の中から一つだけ選んで、 に番号を書いてください。（塾で勉強したり、家庭教師に教わったりしている時間も入れてください。）

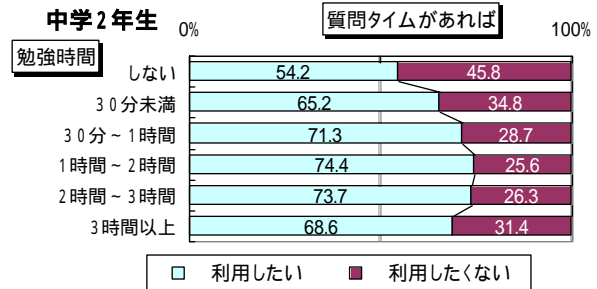
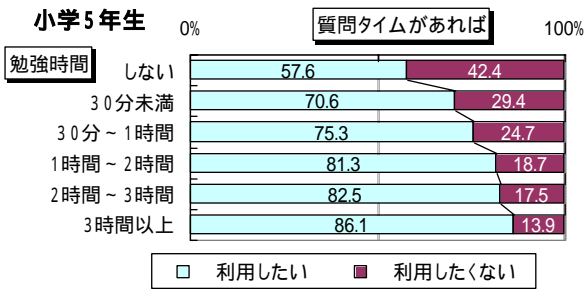


小学生のピークは「30分以上1時間より少ない」で、中学生のピークは「1時間以上2時間より少ない」である。

「まったく、または、ほとんどしない」児童生徒が小学生で20人に一人、中学生で7～8人に一人いる。

(2) 家庭での勉強時間と質問タイム利用希望との関係

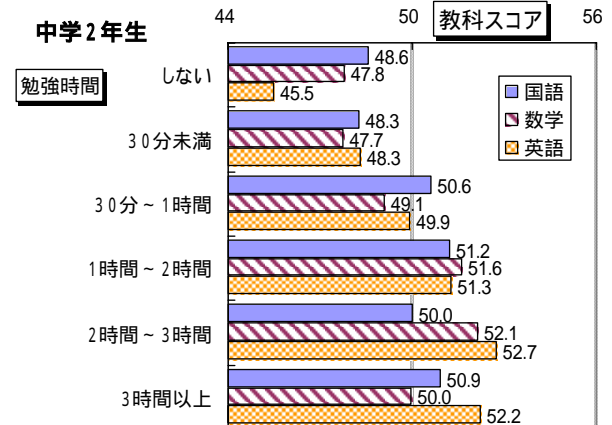
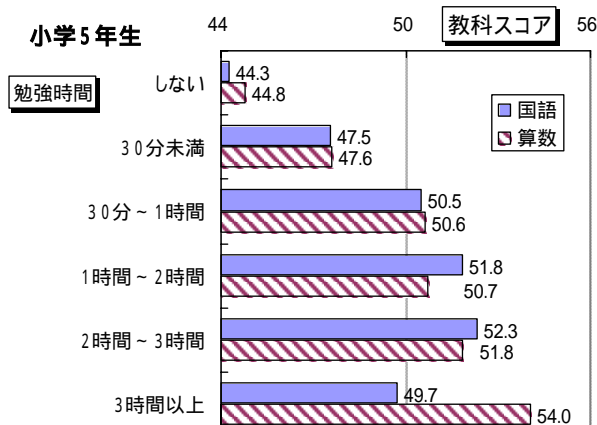
【設問12】と【設問2】(P6参照)について次の各群に分け、クロス集計をし、割合を比較した。
 設問12... ~ 各選択肢
 設問2 ... 「利用したい」(どちらかと言えばを含む)群 「利用したくない」(どちらかと言えばを含む)群



勉強時間が多くなるほど、利用したい割合が増えている傾向にある。ただし、中学生は2時間を超えると減少に転じている。

(3) 家庭での勉強時間と教科スコア(平均偏差値)との関係

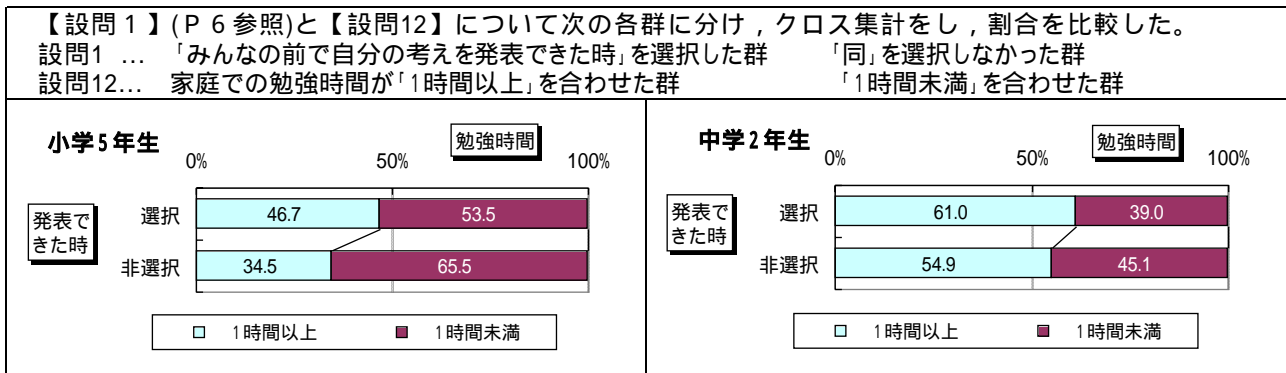
【設問12】について、各選択肢ごとの教科スコアを出し、比較した。



勉強時間が多くなるほど、教科スコアが高くなる傾向がある。ただし、教科によってはスコアが下がっているものもあり、勉強時間の長さが、すべて教科スコアに反映しているわけではない。学力の向上に向けては、発達段階と集中可能な時間を考慮する必要がある。

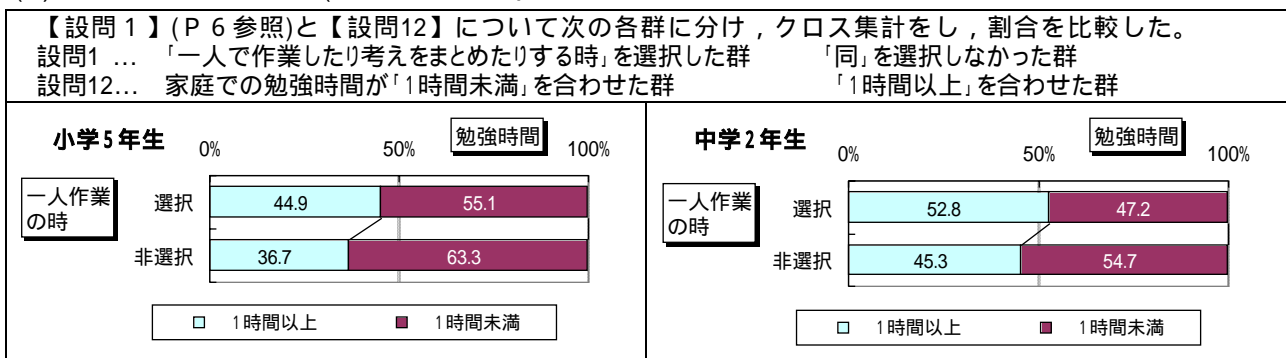
実態2 授業での意欲の喚起は、家庭での学習につながっている。

(4) 「やる気が出る時」(発表できた時)と「家庭での勉強時間」との関係



「発表できた時」にやる気が出ると答えた児童生徒は、そう答えていない児童生徒より、勉強時間が長い(1時間以上)割合が高い。授業での発表で成就感を味わい、家庭学習への意欲とつながっているのではないか。

(5) 「やる気が出る時」(一人作業の時)と「家庭での勉強時間」との関係



「一人作業の時」にやる気が出ると答えた児童生徒は、そう答えていない児童生徒より、勉強時間が長い(1時間以上)割合が高い。授業で「学び方を学ぶ」ことが、家庭学習の実践につながっているのではないか。

その他、「友だちや先生が自分の考えを認めてくれた時」「友だちと競争しながら勉強している時」「グループで話し合いや作業をする時」「授業が分かった時」のそれぞれにおいても、同じ傾向にある。授業で意欲を喚起することが、家庭学習への意欲・実践につながっているのではないと思われる。

考 察

家庭学習時間が長い児童生徒は、学習姿勢が積極的で、学力の定着が進んでいる。授業内容の補充・発展としての家庭学習を習慣化する必要がある。ただし、児童生徒の発達段階や集中可能な時間を考慮し、課題の量や内容を適正なものにする必要がある。

授業での意欲の喚起は、家庭での学習につながっている。授業で「学び方を学び、成就感を味わう」学習活動に取り組むことが、家庭での主体的な学習に結び付くと思われる。

家庭学習は、生涯学習の基礎を培い、自己教育力を育成するものである。学校と家庭が連携を図りながら「わかる授業」と「家庭学習」とを有機的に連動させることにより、「受動的な学びから、能動的な学びへ」「わかる喜びから、できる喜びへ」の転換が望まれる。

提言 6 へ

基礎学力調査

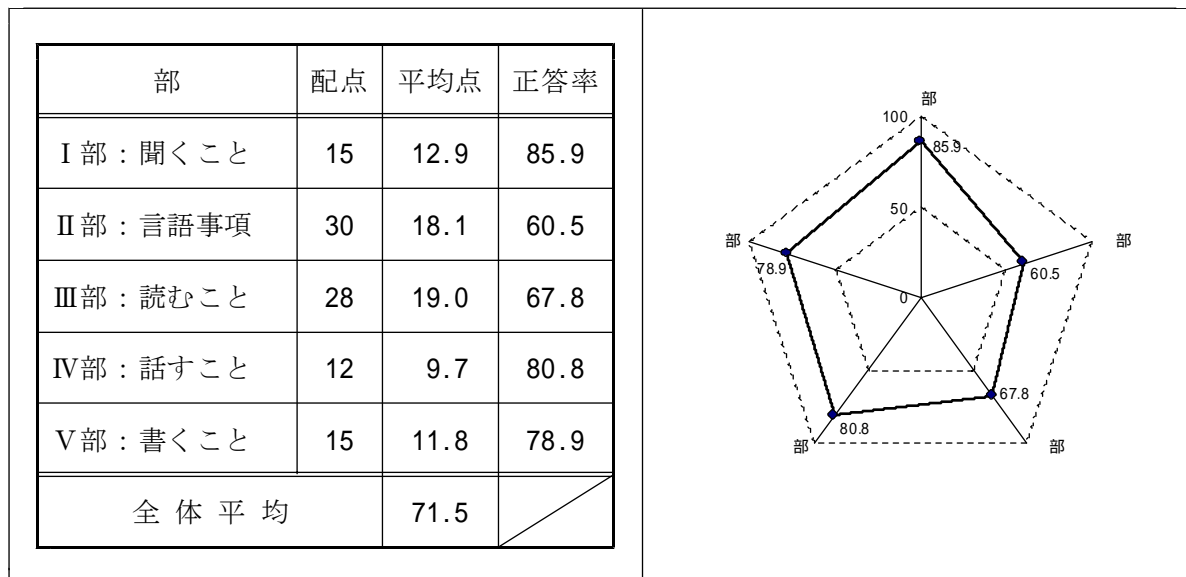
1 小学校国語

(1) 部(領域)別経年比較

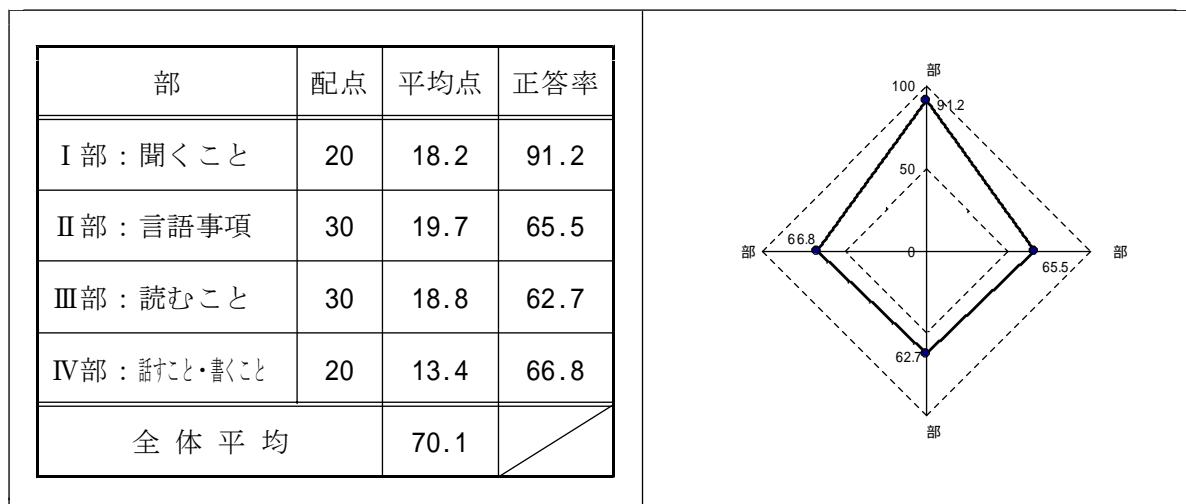
部(領域)別正答率経年比較

年度 \ 部	I部 聞くこと	II部 言語事項	III部 読むこと	IV部 話すこと	V部 書くこと
平成15年度	85.9	60.5	67.8	80.8	78.9
平成14年度	91.2	65.5	62.7	66.8	
増減	-5.3	-5.0	+5.1		

平成15年度 部(領域)別平均点一覧



平成14年度 部(領域)別平均点一覧



(2) 部(領域)別経年比較分析及び考察

- ◎ 今年度の平均点 71.5 点は想定平均点 (70~75 点) の範囲内であり、昨年度の平均点 70.1 点より 1.4 点高い。
- ◎ 部(領域)別では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」は、概ね定着している。一方、「読むこと」と「言語事項」の正答率は低い。これらの傾向は、昨年度と同様である。

部：「聞くこと」について

- 正答率は昨年度より 5.3 ポイント低い (91.2%→85.9%)。話者を複数にするなど問題の難易度を昨年度より上げたからだと考えられる。
- どの設問も 8 割以上の正答率であり、複数の登場人物の考えや話の内容をほぼ聞き取ることができている。

◆ キーワードを用いた効果的なメモの取り方や話者の意図を考えながら聞く習慣を身に付けさせる指導が望まれる。

部：「言語事項」について

- 正答率は昨年度より 5.0 ポイント低い (65.5%→60.5%)。特に、主語・述語の理解の正答率が低く、昨年度と同じ傾向を示している。
- 漢字の書きに関しては、低学年配当の漢字になるにつれ正答率が低くなっている。また、文の構造や読み仮名の表記についても理解が十分とは言えない。

◆ 主語と述語の理解のためには、会話や文章に生きるような指導が大切であり、実生活の中での用例をもとに指導するなどの工夫が必要である。また、漢字の読み・書きに関しては、意味と結びつけながら学習したり、既習の漢字を反復しながら練習したりして、確実に身に付くように継続的な指導が必要である。

部：「読むこと」について

- 正答率は昨年度より 5.1 ポイント高い (62.7%→67.8%)。昨年度の問題文より文章構成が明確で、文章量もやや少ないものを出题したからだと考えられる。
- 特に段落相互の関係を問う問題においては、昨年度より正答率が約20ポイント高くなっている。各段落ごとに中心となる文や段落ごとの書き出しのことばに注目させるなど、段落相互の関係を意識した指導が今後も必要である。

◆ 説明的文章の指導においては、主題を押さえることができるような発問や学習過程の工夫が大切である。また、段落を要約する力も求められるため、自分のことばで書いてまとめるなどの指導の工夫も必要である。さらに筆者の論理の展開の仕方をとらえ、それを活用しながら実際に話したり書いたりする場面を設定する指導の工夫が望まれる。

部：「話すこと」について

- 正答率は80.8%であるが、スピーチ原稿の内容構成についての理解はやや不十分である。

◆ 話す(効果的に話す)学習だけではなく、聞く(他の人のスピーチのよさを聞き取る)学習と関連付けた指導の工夫が望まれる。

部：「書くこと」について

- 正答率は 78.9 %であり、調査報告文を目的や意図に応じて分かりやすく書くことは概ねできている。
- 前後の文のつながりを考え、書く必要のある事柄を整理して書くことについては、十分とは言えない。

◆ 書く目的や相手に応じて必要な要件を簡潔に書かせる短作文指導が必要である。また、活用の仕方等において効果的な自己評価や相互評価の場を設けることが必要である。

(3) 正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点

<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>正答率</td><td style="text-align: right;">44.5</td></tr> <tr><td>誤答率</td><td style="text-align: right;">48.4</td></tr> <tr><td>無答</td><td style="text-align: right;">7.2</td></tr> </table>	正答率	44.5	誤答率	48.4	無答	7.2	(4)	風船	ふうせんをとばす。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>正答率</td><td style="text-align: right;">86.5</td></tr> <tr><td>誤答率</td><td style="text-align: right;">10.5</td></tr> <tr><td>無答</td><td style="text-align: right;">3.1</td></tr> </table>	正答率	86.5	誤答率	10.5	無答	3.1	(1)	き	着る。
正答率	44.5																		
誤答率	48.4																		
無答	7.2																		
正答率	86.5																		
誤答率	10.5																		
無答	3.1																		
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>正答率</td><td style="text-align: right;">59.1</td></tr> <tr><td>誤答率</td><td style="text-align: right;">34.0</td></tr> <tr><td>無答</td><td style="text-align: right;">6.9</td></tr> </table>	正答率	59.1	誤答率	34.0	無答	6.9	(5)	短い	時間がみじかい。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>正答率</td><td style="text-align: right;">62.9</td></tr> <tr><td>誤答率</td><td style="text-align: right;">29.5</td></tr> <tr><td>無答</td><td style="text-align: right;">7.5</td></tr> </table>	正答率	62.9	誤答率	29.5	無答	7.5	(2)	つ	着く。
正答率	59.1																		
誤答率	34.0																		
無答	6.9																		
正答率	62.9																		
誤答率	29.5																		
無答	7.5																		
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>正答率</td><td style="text-align: right;">60.8</td></tr> <tr><td>誤答率</td><td style="text-align: right;">27.2</td></tr> <tr><td>無答</td><td style="text-align: right;">11.9</td></tr> </table>	正答率	60.8	誤答率	27.2	無答	11.9	(6)	覚える	名前をおぼえる。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>正答率</td><td style="text-align: right;">30.2</td></tr> <tr><td>誤答率</td><td style="text-align: right;">65.4</td></tr> <tr><td>無答</td><td style="text-align: right;">4.4</td></tr> </table>	正答率	30.2	誤答率	65.4	無答	4.4	(2)	みぢか	身近な人に会う。
正答率	60.8																		
誤答率	27.2																		
無答	11.9																		
正答率	30.2																		
誤答率	65.4																		
無答	4.4																		
				<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>正答率</td><td style="text-align: right;">54.7</td></tr> <tr><td>誤答率</td><td style="text-align: right;">42.6</td></tr> <tr><td>無答</td><td style="text-align: right;">2.7</td></tr> </table>	正答率	54.7	誤答率	42.6	無答	2.7	(3)	げんいん	原因をさがす。						
正答率	54.7																		
誤答率	42.6																		
無答	2.7																		

2 (言語事項)

四 次の の漢字は読みがなを、 の部分は漢字を に書きましょう。
 なお、漢字には、必要な送りがなもつけましょう。

【分析・考察】

漢字の読みについては、「着る」を約9割の児童ができているのに対して、「着く」ができたのは約6割の児童である。また、「じ」と「ぢ」など発音は同じでも表記が異なる「身近な」は約7割の児童ができていない。「原因」は約5割の児童ができていない。同じ漢字でも意味の違いによって送りがなのつけ方が違ってくる漢字については、定着までには至っていない。また、表記の違いがあるものについても理解が十分ではない。

漢字の書きについては、「風船」(第2学年配当漢字)が約6割の児童ができていない。「短い」(第3学年配当漢字)、「覚える」(第4学年配当漢字)は約6割の児童ができていて、低学年配当の漢字になるにつれ正答率が低くなっている。このことは、漢字が配当されたその学年では理解しているが、定着までには至っていないことを示していると考えられる。

該当学年で学習した後も、文や文章の中で使えるように繰り返し指導し、定着を図る必要がある。その際には、単純な繰り返し学習により児童の興味関心や意欲を失わせることのないよう、必要に応じて辞書を活用することや文脈の中に位置付けて考えることを取り入れるなど、十分に配慮することが大切である。

【指導上の改善点】

新出漢字の指導

- 漢字の読みについては、漢字自体の読みだけでなく、その漢字のもつ意味と結び付けながら指導していくことが大切である。
- 漢字を書くことについては、低学年の段階から「とめ」「はらい」「はね」等を意識させる指導が大切である。また、漢字を読むことと連動させた指導の充実を図ることが望まれる。さらに、筆順を意識しながら「書いて覚える習慣」を身に付けさせていく必要もある。

〈漢字の指導の一例〉

- ・ 声に出して読む。
- ・ 送りがなを意識しながら読む。書く。
- ・ 熟語もいっしょに学ぶ。
- ・ 漢字のもつ意味を考える。
- ・ 視写を活用する。
- ・ 作文の推敲を利用する。

(間違えたところを教師が指摘し、児童自身に推敲させていく。)

繰り返しの指導

- 該当学年で学習した後も、文や文章の中で使えるように繰り返し指導し、漢字のもつ意味を考えながら正しく使ったり、前の学年までに学習した漢字を意識して使ったりする習慣を身に付けさせ、定着を図っていく必要がある。

自己評価

- 児童自身が「できていること」と「できていないこと」を自覚することは、学習への意欲を高めたり、確実に身に付けたりすることにつながると考える。小テストや確認テストを随時実施するなどして自己チェックを行わせ、学習した漢字が確実に「書ける・読める」という喜びを味わわせるような指導の工夫が望まれる。

言語環境

- いつでも漢字にふれられるような掲示の工夫や読書に親しませる環境づくりをすることも、意欲・関心を高める上で大切になってくる。また、辞書が必要なときには、いつでも使えるようにしておくことが大切である。このことは、辞書を利用して調べる習慣を身に付けることと関連づけて、漢字を使う力を伸ばしていく一つの方法である。

家庭学習

- 家族の褒めの一言で児童はやる気を出すことが多く、授業と連動した家庭学習の習慣形成が必要である。そして、身に付けた知識を活用して、日常の言語生活を振り返らせるために、漢字を単に文字として覚えるのではなく、熟語づくりや短文づくりをさせながら文の中で覚えていくような課題の与え方の工夫が求められる。

〈言語事項〉

三 次の文全体で、主語と述語はどれでしょう。その番号を
に書きましょう。

(1)

わたしは
おじいさんに
手紙を
書いた。

1 主語

正	答	率	50.1
誤	答	率	48.7
無	答		1.2

4 述語

正	答	率	63.2
誤	答	率	35.6
無	答		1.2

(2)

わたしが
育てた
赤い
花が
きのう
咲いた。

4 主語

正	答	率	36.9
誤	答	率	61.9
無	答		1.2

6 述語

正	答	率	61.3
誤	答	率	37.4
無	答		1.3

【分析・考察】

主語・述語の問題を2問出題した。主語を理解することについては、単文では約5割、複文では約6割の児童ができていない。述語を理解することについては、約6割の児童ができています。

文の最初に出てきた部分が「主語」、最後にある部分が「述語」と形式的にとらえてしまう傾向が見られ、文の中での位置付けを考えて理解できているとは言えない。

【指導上の改善点】

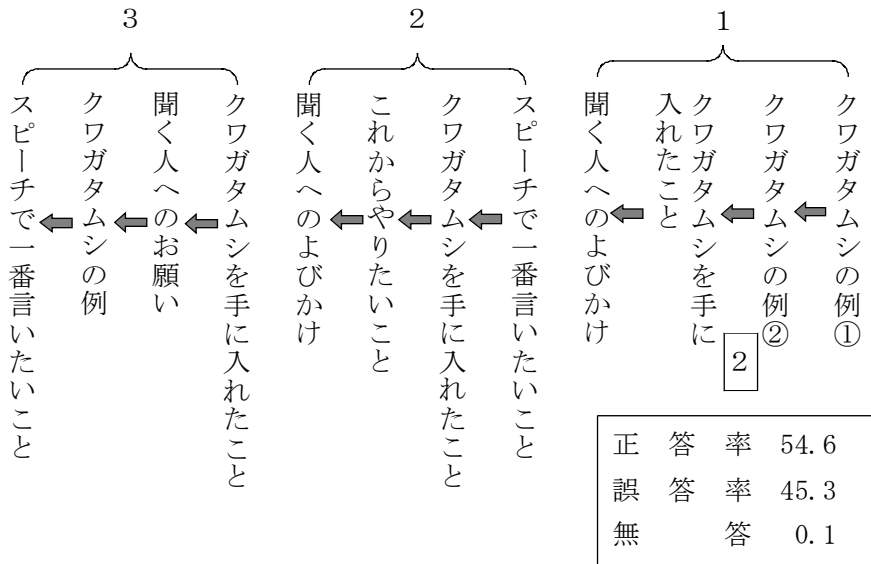
主語と述語との関係については、文を構成するにあたって最も基礎となるものである。文としての意味が通じるためには、主語と述語とがきちんと照応する指導が重要になってくる。低学年の段階から、主述の整った文型や文末をはっきりできることに重点を置き、その上で、主語が省かれている文などについても、実生活の中での用例をもとに指導し、会話や文章に生きるように導いていく指導の工夫が望まれる。

「話すこと」「書くこと」においても、主語がはっきりしなかったり、主語と述語がねじれていたりすると意味が通じないことなどを具体的に気付かせるような授業を創意工夫し、文のきまりとして意識付けることが大切である。

〈話すこと〉

4 次の文章は、山口君が「自分の一番好きな生き物」についてクラスでスピーチ（お話をするために書いた原稿）です。この原稿を読んで、下の問いに答えましょう。

- ① ぼくが一番好きな生き物は、クワガタムシです。この図鑑の写真をみてください。何だと思いますか。これは、オオクワガタとよばれる種類のクワガタムシです。
- ② 写真を見ると、わかると思いますが、とても大きくて、力強い大あごがあります。このすがたと長生きするところがぼくは大好きです。
- ③ このオオクワガタは、虫とりに行ってもなかなか見つかりません。ぼくも見つけることができませんでしたが、夏休みに、親せきのおじさんがつかまえてきてくれました。おじさんから聞いた話では、山に登るとちゅうでぐうぜんに見つけたそうです。
- ④ ぼくは、家族に『クワガタ博士』と呼ばれています。友達にもいろいろなることを教えてあげることができるようにもっともつとクワガタムシについて本を使って調べたいです。そして、一さつのノートにまとめようかと考えています。
- ⑤ また、他には草花も好きなので、草花の本も図書室で探してみたいです。
- ⑥ みなさん、クワガタムシについて知りたいことがあったら、ぼくに聞いてくださいね。



二 この原稿の内容は、大きくまとめるなどのように組立てられますか。次の中から最もよいもの一つを選び、その番号を□に書きましょう。

【分析・考察】

スピーチ原稿の組立て方を理解することについては、約5割の児童ができていない。何を伝えるためのスピーチであるかをきちんととらえられていないことが、一つの原因として考えられる。

【指導上の改善点】

意図がわかるように話を組立てることについては、段落相互の関係をつかんで読むことや接続語の果たす役割を理解することと大きな関わりがあり、「話すこと」と「読むこと」とを関連付けた指導の工夫が望まれる。また、話を構成するにあたっては、「初め」「中」「終わり」の三部構成にして伝えるなど、目的に応じて分かりやすく話を組立てる力をつけさせることが大切である。

2 小学校算数

(1) 部(領域)別経年比較

部(領域)別正答率経年比較

年度 \ 部	I部 数と計算	II部 量と測定	III部 図形	IV部 数量関係
平成15年度	73.1	56.0	66.4	58.6
平成14年度	74.0	55.7	66.8	54.6
増減	-0.9	+0.3	-0.4	+4.0

平成15年度 部(領域)別平均点一覧

部	配点	平均点	正答率
I部：数と計算	36	26.3	73.1
II部：量と測定	20	11.2	56.0
III部：図形	24	15.9	66.4
IV部：数量関係	20	11.7	58.6
全体平均		65.1	

平成14年度 部(領域)別平均点一覧

部	配点	平均点	正答率
I部：数と計算	36	26.6	74.0
II部：量と測定	20	11.1	55.7
III部：図形	20	13.4	66.8
IV部：数量関係	24	13.1	54.6
全体平均		64.1	

(2) 部(領域)別経年比較分析及び考察

- ◎ 今年度の平均点 65.1 点は想定平均点 (70~75点) を下回り、昨年度の平均点 64.1 点より 1.0 点高い。
- ◎ 部(領域)別では、「数と計算」と「図形」の知識・技能については、おおむね定着している。一方、「量と測定」と「数量関係」の正答率は低い。これらは、昨年度と同じ傾向である。

部：「数と計算」について

- 正答率は、昨年度とほぼ同じ (74.0%→73.1%) で、各設問ごとの結果も昨年度と同じ傾向を示している。
- 整数や小数、分数の加減乗除等については、8割前後の正答率である。一方、「小数の位取り(小数点の移動)」や「概数を用いた加法の見積もり」、「余りのある割り算」については、十分に理解できているとは言えない。特に、「余りのある割り算」では、立式はできるものの、正しい計算処理ができていない。

◆ 答えを見当付けたり、結果を確かめたりする場面を多く設定するなど、結果についての見通しや確かめを常に意識できるような指導の工夫が望まれる。

部：「量と測定」について

- 正答率は、昨年度とほぼ同じ (55.7%→56.0%) で、各設問ごとの結果も昨年度と同じ傾向を示している。
- 平行四辺形の求積問題の正答率は 88.8 % と高く、多くの児童ができています。一方、ひし形や複合図形の求積問題では、正答率が低い。

◆ 基本的な図形である三角形等の求積について十分に理解・習熟させることはもとより、分割や等積・倍積変形といった具体的な操作活動を取り入れるなど、既習事項を活用したり、多様な求積方法を体験したりできるような指導の工夫が望まれる。

部：「図形」について

- 正答率は、昨年度とほぼ同じ (66.8%→66.4%) で、各設問ごとの結果も昨年度と同じ傾向を示している。
- 角度を求める問題やひし形の作図では、8割前後の児童ができています。一方、複合図形の中で垂直な2直線を判別する問題や、平行四辺形等の性質をもとに図形を判別する問題では、正答率が低い。

◆ 図形相互の関連・比較に焦点を当てた算数的活動を取り入れるなど、図形に対する多様な見方や考え方を深め、論理的な思考ができるような指導の工夫が望まれる。

部：「数量関係」について

- 正答率は、昨年度とほぼ同じ (54.6%→58.6%) で、各設問ごとの結果も昨年度と同じ傾向を示している。
- 伴って変わる二つの数量の関係を表に表すことはほとんどの児童ができています。一方、二つの数量の関係を理解し、それを利用することについては正答率が低い。

◆ 伴って変わる二つの数量については、図や表等を用いて問題解決する場や時間を十分保障するなど、二つの数量の関係をみいだす楽しさやその関係を利用することの有用性を実感できるような指導の工夫が望まれる。

(3) 正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点

<数と計算>

6 25.4 dl のペンキがあります。次の問題に答えましょう。

(2) この25.4 dl のペンキを4 dl ずつビンに入れます。4 dl 入りのピンは何本できますか。また、ペンキは何 dl ありますか。式と答えを書きましょう。

(式) $25.4 \div 4$



正答率	32.3
誤答率	56.9
無答率	10.8

答え (6) 本できて、(1. 4) dl あまる

【分析・考察】

包含除の考え方をを用いる余りのある除法の文章題については、立式は約8割の児童ができていて、計算処理は約7割の児童ができていない。

計算処理についての誤答例としては、次のようなものが考えられる。

- ① 包含除の意味の理解が不十分なもの (6.35, 6.3あまり2, 6.3あまり0.2)
- ② 余りの処理の仕方が不適切なもの (6あまり14)

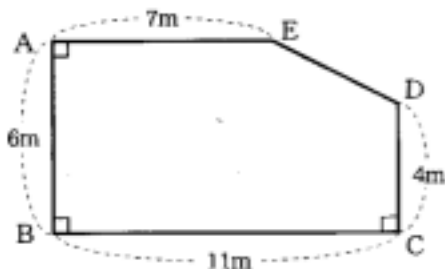
このように、包含除の意味や余りの処理の仕方が十分理解できていないと思われる。また、問題に応じた結果の確かめも十分ではないと思われる。

【指導上の改善点】

等分除と包含除の違いを意識した指導の工夫が望まれる。特に、包含除の意味や余りの処理の仕方については、常に具体的な問題場面を意識させながら、さらに理解を深めていく指導が望まれる。また、答えを見当付けたり、結果を確かめたりする場面を多く設定するなど、結果についての見通しや確かめを常に意識できるような指導の工夫が望まれる。

<量と測定>

- 9 下の図のような五角形の畑があります。A, B, Cの角度は 90° です。この畑の面積を求めましょう。



正答率	26.4
誤答率	63.3
無答率	10.3

答え

62 m²

【分析・考察】

複合図形の面積を求めることについては、約3割の児童しかできていない。

求積方法としては、次のような方法が考えられる。

- ① 長方形や三角形に分ける方法
- ② 長方形と見なして三角形の面積を引く方法
- ③ 方眼をかくて数える方法

一つの図形をいくつかの図形に分けて考えたり、別の図形に見なして考えたりするなどの、図形に対する多様な見方や考え方が十分ではないと思われる。

【指導上の改善点】

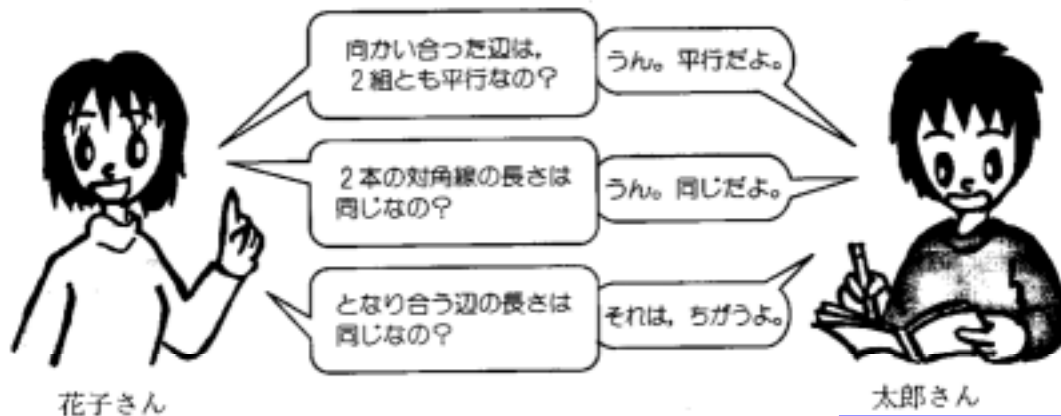
面積の求め方には、基本的に次の三つの方法がある。

- ① 公式を利用する方法
- ② 公式を利用できる図形に分割する方法
- ③ 公式を利用できる図形に見なす方法

この3種類の方法を意識しながら指導に当たるとともに、図形を分割したり、ある図形に見なしたりするなどの具体的な操作活動を取り入れ、図形の多様な見方や考え方を深める指導の工夫が望まれる。

<図形>

13 花子さんは、太郎さんがノートにかいた四角形の名前をあてようとしています。次の2人の会話を読んで、太郎さんがかいた四角形の名前を、下のアからエの中から1つ選んで、記号で答えましょう。



- ア 長方形 イ 正方形 ウ 平行四辺形 エ 台形

正答率	37.1
誤答率	62.0
無答率	1.0

答え

【分析・考察】

平行四辺形や長方形等の図形の性質を用いて、図形を判別する問題については、約6割の児童ができていない。

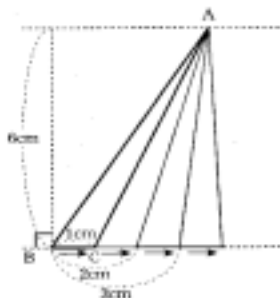
正答率が低かった原因については、まず、「向かい合った辺」や「となり合う辺」等の用語の理解が十分ではないことが考えられる。また、それぞれの図形の性質の理解はできていても、それらを関連付けた理解が不十分であること、さらに、これらの図形の分類整理が十分でないことなども考えられる。

【指導上の改善点】

図形相互の関連・比較に焦点を当てた算数的活動を取り入れるなど、図形に対する多様な見方や考え方を深めるとともに、図形の分類整理を通して、論理的な思考ができるような指導の工夫が望まれる。

<数量関係>

17 下の図のように、高さが6cmの三角形ABCがあります。底辺BCの長さを1cmずつ長くしていくとき、次の問題に答えましょう。



(1) 下の表の①、②にあてはまる数を書きましょう。

底辺の長さ (cm)	1	2	3	4	5	...
三角形の面積 (cm ²)	3	6	①	12	②	...

答え ① ②

正答率 94.7
誤答率 3.8
無答率 1.6

※①と②との平均

(2) 底辺の長さが2cmの三角形ABCがあります。この三角形の底辺の長さを5倍したときの三角形の面積を求めましょう。

答え cm²

正答率 40.8
誤答率 54.4
無答率 4.7

(3) 三角形ABCの面積が54cm²になるのは、底辺が何cmのときでしょう。

答え cm

正答率 33.7
誤答率 60.3
無答率 6.0

【分析・考察】

伴って変わる二つの数量の関係を表に表すことについては約9割の児童ができていますが、その関係をつかむことについては約6割の児童ができていない。さらに、その関係を利用することについては約7割の児童ができていない。

答えを求める方法としては、次のような方法が考えられる。

- ① 表を完成させて答えを求める方法
- ② 底辺が2倍、3倍…になると、面積も2倍、3倍…になることを利用する方法
- ③ 面積が底辺の3倍になっていることを利用する方法

表を地道に完成させていく方法は、関係を利用することの基礎となるものであり、能率的ではないが、児童はその活動の中でできまりを発見したり、関係を見いだしたりすることができる。このような、図や表を活用して問題解決をする体験や、関係をつかんでそれを利用したりする体験が十分ではないと思われる。

【指導上の改善点】

図や表を用いて問題解決をする場や時間を十分保障するなど、二つの数量の関係を見いだす楽しさやその関係を利用することの有用性を実感できるような指導の工夫が望まれる。

3 中学校国語

(1) 部(領域)別経年比較

部(領域)別正答率経年比較

年度	部	I部 聞くこと	II部 言語事項	III部 読むこと(現)	IV部 読むこと(古)	V部 書くこと
平成15年度		80.1	53.5	63.6	59.7	67.6
平成14年度		90.1	63.5	64.4	56.6	63.4
増減		-10.0	-10.0	-0.8	+3.1	+4.2

平成15年度 部(領域)別平均点一覧

部	配点	平均点	正答率
I部：聞くこと	15	12.0	80.1
II部：言語事項	15	8.0	53.5
III部：読むこと(現)	30	19.1	63.6
IV部：読むこと(古)	15	9.0	59.7
V部：書くこと	25	16.9	67.6
全体平均		65.0	

平成14年度 部(領域)別平均点一覧

部	配点	平均点	正答率
I部：聞くこと	15	13.5	90.1
II部：言語事項	15	9.5	63.5
III部：読むこと(現)	30	19.3	64.4
IV部：読むこと(古)	15	8.5	56.6
V部：書くこと	25	15.8	63.4
全体平均		66.7	

(2) 部(領域)別経年比較分析及び考察

◎ 今年度の平均点 65.0 点は想定平均点 (65~70 点) の範囲内であり、昨年度の平均点 66.7 点より 1.7 点低い。

◎ 部(領域)別では「聞くこと」の正答率が他の領域より高く、「読むこと(古)」と「言語事項」の正答率は他の領域よりかなり低い。全体的傾向として、「聞くこと」の正答率が高く、「読むこと(古)」の正答率が低いことは昨年度と同様である。

部：「聞くこと」について

○ 正答率は昨年度より 10.0 ポイント低い (90.1%→80.1%)。これは、話者を複数にするなど問題の難易度を上げたことが原因と考えられる。

◆ 「聞く力」を高めるためには、聞く姿勢や態度など、日常生活場面を含めて、様々な指導場면을意識的に設定するとともに、具体的な聞き取りのスキルを指導する必要がある。例えば、うなずきながら聞く、メモをとりながら聞く、必ず質問をする等、継続して指導することが求められる。また、教師自身がよき聞き手としての手本を示すとともに、よき話し手となって、聞き手を育てていく必要がある。

部：「言語事項」について

○ 正答率は昨年度より 10.0 ポイント低い (63.5%→53.5%)。漢字の読みや文法事項の難易度を上げたことも一因ではあるが、基本的な語彙や文法についての理解が十分とは言えない。

◆ 言語についての知識・理解は他の3領域の言語活動を支えるものであり、言語能力の土台となるものである。言語事項以外の単元等でも取り上げるなど有機的に取り扱い、家庭学習と連動させた指導をすることにより、知識の定着を図る必要がある。

部：「読むこと」について

○ 正答率は現代文が昨年度より 0.8 ポイント低く (64.4%→63.6%)、古文が昨年度より 3.1 ポイント低い (59.7%→56.6%)。

○ 現代文について、論理的な文章を狭い範囲で読み取ることは概ねできているが、文章構成を把握したり、中心となる語句を押さえて内容を整理する力は十分とは言えない。古文の読み取りも十分とは言えない。

◆ 論理的な文章の読解力を身に付けさせるために、文章構成やキーワードに注目して分析的に読ませる指導、言語事項と有機的に関連させた指導の充実が急務である。段落の最初の語句や文末表現に注意しながら読むなど、文章読解の基本を押さえた指導が必要である。

また、「古典に親しむ」ことを主眼としながらも、古文と現代語訳を対照できるノートを作成方法を指導したり、本文を何回も音読させる中で文章の流れを理解させるなど、「古典を理解する基礎」を養うための工夫が必要である。

部：「書くこと」について

○ 正答率は昨年度より 4.2 ポイント高い (63.4%→67.6%)。題材を昨年度の「敬語」から学校行事等「身近なこと」にしたり、解答形式を二段落に分けたりしたため、生徒が取り組みやすくなったのであろう。

◆ 書く力を高めるためには、学習段階に応じて、3年間を見通した系統的な指導を行うとともに、個々の生徒の実態に応じた指導が必要である。読む活動との連動を図り、発達段階に応じた学習過程を踏まえ、計画的に指導することが求められる。また、書く意欲を喚起し、体験や読書を通して書く内容を蓄積させるとともに、書き方を身に付けさせる指導を継続して行う必要がある。

(3) 正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点

3

【分析・考察】

文章の中心となる「広い世界」という語句を押さえ、内容を整理することについては、約6割の生徒ができていない。無答率が24.3%であり、4分の1の生徒が全く答えられていない。

これは、論理的な文章を狭い範囲で読み取ることは概ねできるが、文章構成を把握したり、中心となる語句を押さえて内容を整理したりする力が定着していないためであろう。右記の設問でも、「広い世界」がキーワードであることを理解できていない。昨年度の設問でも、「要するに」や「つまり」など、文章読解の要となる語句を的確に押さえ内容を整理する力が不十分であった。

正答を導き出せなかった理由としては、以下の①～③が考えられる。

- ① 文章に興味をもち、内容の大体を読むことができていない。
- ② 中心となる語や文をとらえて文章を正しく読むことができていない。
- ③ 文章の中心の部分と付加的な部分、事実と意見の関係を押さえ、段落相互の関係を考えながら文章を的確に読むことができていない。

生徒一人一人の誤りが、①～③のどの段階での誤りであるかを分析する必要がある。その上で、一人一人に必要とされる指導の在り方を探ることが求められる。

【指導上の改善点】

今後の方策として、授業場面においては、次のような学習指導を継続的に行う必要がある。

- ① 文章読解の技能を教え、ワークシートなども活用しながら、分析的、構造的に読み解く力を付ける。
- ② 言語事項との有機的な関連を図り、基礎的・基本的な知識の定着を図る。
- ③ 音読を重視し、生徒の活動を通して読む力を身に付けさせる。
- ④ 授業中に時間を決めて解答を書かせるなど、演習を含めた授業構成を工夫する。

定着が不十分な生徒に対しては、定期考査の答案返却時などに正答を導き出す手立てを構造的に説明したり、同じような構成の平易な文章を使って演習させたりする必要がある。定期的なノート点検を行い、ノートの整理の仕方を教えることも大切である。

また、家庭学習との連動を図り、既習事項の反復練習課題や次の授業へつなぐ家庭学習課題を与えるなど、学習内容の定着と、興味・関心を高めるための工夫が求められる。

さらに、日常生活においても、日ごろから次のような指導の工夫を図る必要がある。

- ① 学校での「朝の読書」の時間など定期的に設定された読書の時間はもとより、生徒自らが本に関する興味・関心を高め、家庭でも進んで読書するよう、学習環境を整え、読書への啓発に取り組む。
- ② 書く習慣を身に付けさせるために、例えば、教材を視写させたり、「生活の記録」や三行日記に取り組ませたりするなど継続的に指導する。
- ③ 書くための課題を見付けたり材料を集めたりする力を身に付けさせるために、様々な題材についての短くわかりやすい新聞記事を抜粋して読ませるなど、ものの見方や考え方を広げ深める指導の充実を図る。

〈読むこと(現代文)〉

3 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちの周りには、いろいろな動物がすんでいます。こういう動物たちも言葉を持っているのでしょうか。

みなさんは、アリの観察したことがありますか。ケーキのかけらを落としておくと、しばらくするとたくさんのアリがその周りに群がって、せっせとそれを巣の方向へ運んでいくのが見られます。巣へもどる途中のアリが、巣からやってきたアリと出会うと、二匹はしばらく立ち止まって何かを話しているように見えます。まるで道を教えてやっているようです。動物学者が調べたところでは、次のようなことが分かっています。まず、最初に、一匹のアリが甘いものが落ちてくるのを発見します。そうすると、そのアリは巣の方へもどり始めるのですが、そのときアリの脚の先から、ある特別なにおいが出るようになります。巣にいたアリたちは、このにおいの道をたどって、甘いもののある所まで行くというのです。アリの言葉は、においによっているというわけです。

動物の言葉の中で、ミツバチの言葉はいちばんよく研究されたものの一つです。みつのある花を見つけたミツバチは、すぐ巣へ飛んで帰ります。そして巣の入り口の所で、忙しくまっすぐ走ってみたり、くるっと回転してみたり、決まった動作をしてみせます。これを「ミツバチのダンス」と呼んでいる人もいますが、このダンスには二種類あるということが知られています。一つは、みつがわりあい近くにあるとき、もう一つは、もっと遠いところにあるとき、そしてこの後の場合には、そのミツバチの走ってみせる方向とそのときの太陽の位置とから、ほかのミツバチたちは甘いもののある方向まで分かるということです。たとえていうならば、ミツバチは二つの単語を持っていて、それを使い分けているわけです。

(A)、動物たちも言葉を持っていて、生きていくために必要なことを、お互いに伝え合っているらしいのです。

それでは、動物たちの言葉は、私たち人間の言葉と同じものではないか。

2

(3) 動物たちの言葉と私たち人間の言葉との間には、大きな違いがいくつかあります。アリであれば、えさを見つげると、脚の先からにおいを出すものが自然に出てくるというふうにもともと体に仕組みまれているのです。

3

(4)

人間の言葉は、こういうふうにはいきません。私たちが日ごろ使っている日本語ですと、まるで生まれたときから身につけていたように思えるかもしれませんが、これは、みんな私たち自身が他の人から教えられたか、あるいは、他の人が使っているのを見たり聞いたりして学び知ったのか、どちらかです。また、動物の言葉は、今、ここにある事柄を伝えることができるでしょうが、「今」と「ここ」をこえた、もつと(B)の事柄を伝えることはできないでしょう。

4

私たち人間の世界は、動物の世界のように閉じたものではありません。「今」「ここ」の事柄をはるかにこえて、過去のこと、未来のことも、そして実際にはありえない想像上のことであっても、表し、伝えることができます。

人間は言葉を学べば学ぶほど、世界が広がっていきます。そして、さらにすすんで、外国語を身につけたとしたり、私たちの世界はどれほど広くなるのでしょうか。人間の言葉は私たちがいくらでも広い世界へと連れていってくれます。

(池上嘉彦「動物の言葉と人間の言葉」による。ただし、一部変更。)

問題

六 文章中の(B)に入る言葉を、人間の言葉は、という語句より後の文章から探し、四字で抜き出しなさい。

広
い
世
界

正答率	39.7
誤答率	36.0
無答率	24.3

〈言語事項〉

2 次の一から四までの各問いに答えなさい。

二次の文の —— 線部「夜空に」は、どの文節を修飾していますか。

修飾されている一文節を抜き出し [] の中に書きなさい。

私は冬の夜空に流れ星を三つも見つけた

見つけた

正答率	8.2
誤答率	86.7
無答率	5.1

三次の文の —— 線部「りっぱに」と同じ品詞の単語を後の [] の

中から一つ選び、その番号を [] の中に書きなさい。

長崎ゆめ総体で、高校生がりっぱに役割を果たした。

- 1 しばらく 2 静かだ 3 おもしろい 4 笑う

正答率	36.5
誤答率	62.8
無答率	0.7

四次の文の —— 線部を、1～3は漢字に、4～6はひらがなに直しな

さい。

2 彼女は国語のせいせきがよい。

成績

正答率	30.4
誤答率	59.5
無答率	10.1

【分析・考察】

文の構成を理解し、文節相互の修飾・被修飾の関係をとらえることについては、約1割の生徒しかできていない。「りっぱに」が「静かだ」と同じく形容動詞であることについては、約6割の生徒ができていない。昨年度の文節の数を問う設問では正答率が56.8%であったが、今年度の「修飾されている一文節」を問う設問では正答率が8.2%となった。「修飾」という語句の意味が理解できていなかったことも正答率の低さの一因であろう。また、昨年度の形容詞の正答率が55.9%、今年度の形容動詞の正答率が36.5%であり、基礎的な文法の理解が十分とは言えない。

漢字の読み書きについても、「成績」という漢字の書き取りについては、約7割の生徒ができていない。誤答率が59.5%であるが、そのほとんどが「績」を「積」と解答したものであろう。字体の似ている漢字を混同するなど、定着が十分であるとは言えない。

【指導上の改善点】

今後の方策としては、言葉の単位、品詞、主語と述語の関係、修飾・被修飾の関係など最も基礎的な事項については、短文を用いて構造的に説明したり、構文を提示して短文を書かせたりするなど、知識を定着させるための工夫が必要である。言語事項は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」すべての領域にわたって必要とされる基礎的な知識であるにもかかわらず、理解と定着が十分ではないという実態を踏まえ、3領域の単元を学習する際にも言語事項と関連させるなど、継続的で粘り強い指導が必要である。

漢字や語句の指導については、辞書の引き方や辞書を用いて学習する習慣を身に付けさせ、家庭学習と連動させた反復練習や定期的な小テストを実施するなど、少しずつ確実に定着させる手立てが求められる。漢字の成り立ちや意味についてわかりやすく説明し、字体の似ている漢字や同じ漢字を使った熟語を集めて指導したり、類義語や対義語をあわせて指導したりするなど、興味・関心をもって取り組めるよう様々な単元で有効に取り上げていくことが望まれる。

〈読むこと〉(古文)

4 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある時、狐、餌食を求めかねて、ここかしこさまよふ所に、鳥、肉をく

はへて木の上ををり。狐、この肉を取らまほしくおぼえて、鳥のぬける木

のもとに立ち寄り、「いかに御辺、御身はよろづの鳥の中にすぐれてうつ

くしく見えさせおはします。しかりといへども、すこし事足りたまはぬこ

ととでは、お声の鼻声にはべり。ただし、このほど世上に申ししは、お声

もことのほかによくわたらせたまふなど申してこそ候へ。あはれ一節聞か

まほしうこそはべれ」と申しければ、鳥、この儀を誠と心得て、さらば声

を出ださむとて口をはたけるひまに、つひに肉を落としぬ。狐、これを

取つて逃げ去りぬ。

(『日本古典文学大系 伊曾保物語』による。ただし、一部変更。)

問題

二 文章中の 申しければ (3) の主語にあたる言葉を答えなさい。

狐

正答率	29.7
誤答率	54.9
無答率	15.4

【分析・考察】

文脈における主語と述語の呼応を正確に押さえることについては、約3割の生徒しかできていない。動作の主体が「狐」と「鳥」の二語だけであるにもかかわらず正答を導き出せていない。

昨年度の設問でも、主語を問う問題の正答率は2割に達しておらず、古文読解に必要な動作や行為の主体を押さえるといった基礎的な学習事項の定着が十分とは言えない。主語と述語の呼応については、小学校国語でも正答率が低く、今後の課題である。

【指導上の改善点】

今後の方策としては、音読や現代語訳との対照を通して文章全体の流れを理解させることはもとより、古文と現代語訳を対照できるノートを作成させ、一文ごとの主語と述語の関係を押さえながら読み解いていくことが大切である。情景描写や人物の行動、会話などを通して、現代に生きる自分自身と重ね合わせ、共通点や相違点を考えることにより、古典に関する興味・関心を深めていくことが求められる。また、美しい日本語の源は古語にあることを踏まえ、古語についても折にふれて紹介し、言語感覚を磨くことが望まれる。

4 中学校数学

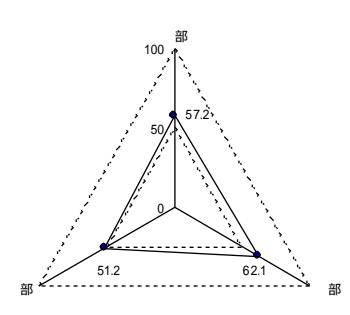
(1) 部(領域)別経年比較

部(領域)別正答率経年比較

年度 \ 部	I 部 数と式	II 部 図形	III 部 数量関係
平成15年度	57.2	62.1	51.2
平成14年度	65.4	73.7	52.1
増 減	- 8.2	- 11.6	- 0.9

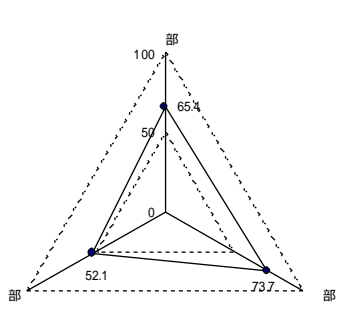
平成15年度 部(領域)別平均点一覧

部	配点	平均点	正答率
I 部：数と式	33	18.9	57.2
II 部：図形	33	20.5	62.1
III 部：数量関係	34	17.4	51.2
全体平均		56.8	



平成14年度 部(領域)別平均点一覧

部	配点	平均点	正答率
I 部：数と式	33	21.6	65.4
II 部：図形	34	25.1	73.7
III 部：数量関係	33	17.2	52.1
全体平均		63.8	



(2) 部(領域)別経年比較分析及び考察

- ◎ 今年度の平均点 56.8 点は想定平均点 (65~70点) を下回り、昨年度の平均点 63.8 点より 7.0 点低い。
- ◎ 部(領域)別では、「図形」の正答率が他の2領域より高く、「数量関係」が最も低い。これらの傾向は、昨年度と同様である。

部：「数と式」について

- 正答率は昨年度より 8.2 ポイント低い (65.4%→57.2%)。整式の除法については昨年度よりも正答率が高く、分数と整数の加減法の計算問題は予想以上に正答率が低かった。文字式で表すことが苦手で、特に[3]「1次方程式の利用」の問題が平均点を下げる結果になったものと思われる。
- 単純な計算技能は定着しているが、昨年度と同様に、文字式や分数に対する抵抗感が強いように思われる。

◆ 数式の計算技能は他の領域の基礎となる内容である。計算技能を確実に身に付けさせるには、継続的な指導が必要である。生徒の実態を把握し、個に応じた宿題を与えたり、学習中の内容だけでなく既習の学習内容についても定期的な宿題を出したりする工夫が望まれる。

部：「図形」について

- 正答率は昨年度より 11.6 ポイント低い (73.7%→62.1%)。今年度は[5]「角の性質」の問題での低下が著しい。これは昨年度よりも論証的な思考が必要な問題であったためと思われる。
- [6]「立体のいろいろな見方」の問題では正答率は比較的高い値が出ているが、図形の意味が確実に理解されているとは言えない。また、求積問題では昨年度同様正答率が低い。

◆ 昨年度も言及したように、図形概念を培うために立体模型を観察してその性質を理解したり、厚紙を利用して立体を製作したりするなど、数学的活動を多く取り入れて、図形の定着を図る必要がある。さらに、具体的な数値を使っての計算や文字を使っての証明等、生徒の学習状況に応じて授業を展開することが望まれる。

部：「数量関係」について

- 正答率は昨年度より 0.9 ポイント低い (52.1%→51.2%)。[8]「1次関数、比例、反比例」の問題は、グラフの本数を多くしたが、正答率は昨年度を上回り、グラフの特徴はよくつかんでいる。しかし、昨年度と同様に、グラフから式を求めることが苦手な傾向にある。
- [10]「身近な現象と関数」の問題ではグラフからだけでは正確な値が読みとれない問題へと変更したことにより正答率が昨年度をやや下回った。

◆ 数量関係の領域は身の回りの事象の考察に数学を適用するなど、数学の中でも生活に近い領域である。生徒に数学を身近に感じさせるためにも、できるだけ身近な題材で体験的に学習する授業づくりをする必要がある。その中で、表や式、グラフを有効に活用させることを通して、数学の有用性を味わわせ、定着を図ることが望まれる。

(3) 正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点

<数と式>

1 (2) $1 - \frac{1}{2} + \frac{1}{3}$

$$\frac{5}{6}$$

正答率	51.3
誤答率	42.8
無答率	6.0

【分析・考察】

基本的な分数の計算にもかかわらず，約5割の生徒しかできていない。異分母分数の通分や符号の取扱等の定着が不十分である。

【指導上の改善点】

数式の計算技能は他の領域の基礎になる内容である。個々の習熟の程度に応じて，計算練習の課題を繰り返し与えたり，小テストを実施したりすることが必要である。

<数と式>

3 「画用紙を何人かの生徒に分けるのに，1人に3枚ずつ分けると22枚余ります。また，1人に5枚ずつ分けると8枚足りません。生徒の人数と画用紙の枚数を求めなさい。」

生徒の人数を x 人として，画用紙の枚数を x を使って表す。

1人に3枚ずつ分けると22枚余るので，() 枚となる。

また，1人に5枚ずつ分けると8枚足りないので，() 枚となる。

したがって，方程式 = が成り立つ。

これを解いて，生徒の人数と画用紙の枚数を求めると，

生徒の人数は 人，画用紙の枚数は 枚となる。

(ア)

正答率	57.9
誤答率	30.8
無答率	11.3

【分析・考察】

約4割の生徒ができていない。また，約1割の生徒が無答である。「余る」，「足りない」を「+」で表現するか，「-」で表現するかとまどったものと思われる。

(イ)

正答率	57.4
誤答率	30.9
無答率	11.6

【指導上の改善点】

言葉の意味をよく考えて数式化することを日頃から心掛ける必要がある。文字での表現にとまどいがあるようであれば，具体的数値に置き換えさせ，文字式での表現方法に導くようにすると理解しやすい。

<数と式>

4 問1 底辺 a cm, 高さ h cm の三角形の面積を S cm² とすると, $S = \frac{ah}{2}$ と表すことができる。この式を h について解きなさい。

$$h = \frac{2S}{a}$$

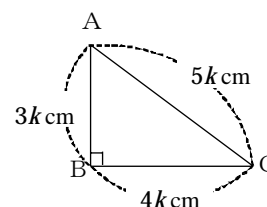
正答率	43.2
誤答率	37.0
無答率	19.8

【分析・考察】

約6割の生徒ができていない。また、約2割の生徒が無答である。等式変形に習熟していないことが主な原因と考えられる。方程式の解法で慣れている「 $x=$ 」には変形できるが、日頃あまり見かけない「 $h=$ 」に変形するというとまどいがあったものとも思われる。また、文字式に対する抵抗感が表れている。

問2 右の図1, 図2のような $AB=3k$ cm, $BC=4k$ cm, $CA=5k$ cm, $\angle ABC=90^\circ$ の三角形ABCについて、次の(1)~(3)に答えなさい。
ただし、 k は正の数とします。

図1



(1) 三角形ABCの面積を k を用いて表しなさい。

$$6k^2 \text{ cm}^2$$

正答率	17.5
誤答率	73.1
無答率	9.5

(2) $k=2$ のとき、三角形ABCの面積は何 cm² ですか。

$$24 \text{ cm}^2$$

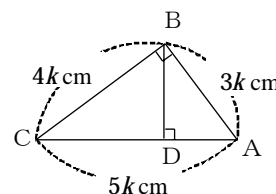
正答率	44.9
誤答率	42.7
無答率	12.4

【分析・考察】

(1)においては約8割の生徒ができていないが、(2)のように具体的な数値になると正答率は高くなっている。ここにも文字式に対する抵抗感が表れている。

(3) 図2で、 $\angle BDA=90^\circ$ のとき、線分BDの長さを k を用いて表しなさい。

図2



【分析・考察】

$$\frac{12}{5} k \text{ cm}$$

正答率	8.1
誤答率	54.3
無答率	37.5

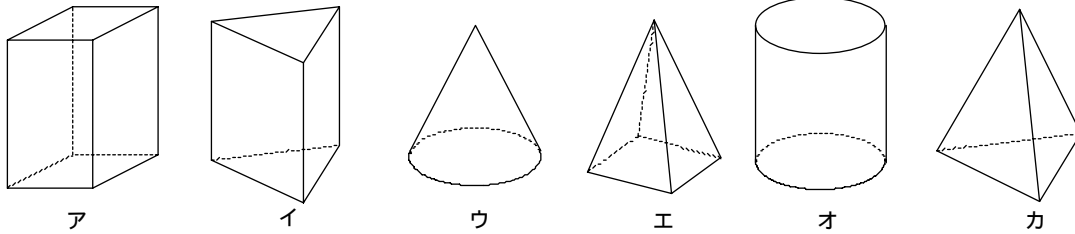
無答も多く、ほとんどの生徒ができていない。底辺と高さとの関係性を踏まえた適切な計算処理ができなかったものと思われる。また、(1)の結果が影響したことも考えられる。

【指導上の改善点】

関数の学習で高さとの面積の関係について考察したり、図形の学習で面積を文字式で表したりするなど、各領域で他の領域の内容を積極的に扱う授業の工夫が必要である。

<図形>

6 次のア～カの立体について、下の各問いに答えなさい。



問1 ア～カのうち、次の(1)～(3)にあてはまる立体をすべて選び、記号で答えなさい。

(1) どの頂点にも辺が3つずつ集まっている立体

ア, イ, カ

完全正答率	50.1
不完全正答率	44.8
誤答率	4.0
無答率	1.1

(3) 三角形をその面と垂直な方向に動かしてできた立体

イ

正答率	41.6
誤答率	54.6
無答率	3.9

【分析・考察】

(1)の完全正答率は約5割で、不完全正答率は約4割である。(3)の正答率は約4割である。問題をよく読まなかったり、図形を丁寧に見ていなかったりするものと思われる。

問2 立体オは底面の半径が3 cm、高さが7 cmの円柱です。

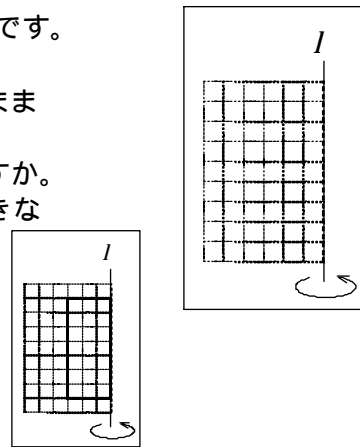
このとき、次の(1)、(2)に答えなさい。

ただし、円周率はπとし、小数になおさないで、そのまま答えなさい。

(1) この円柱はどのような平面図形を回転させたものですか。

直線 l を回転の軸として、右の図にその平面図形をかきなさい。ただし、方眼の1目もりを1 cm とします。

正答率	51.3
誤答率	30.6
無答率	18.2



(2) この円柱の体積は何 cm³ですか。

63 cm³

正答率	37.9
誤答率	43.5
無答率	18.7

【分析・考察】

(1)の正答率は約5割で、(2)の正答率は約4割である。また、両問とも無答が多い。立体図形の性質や求積方法等についての知識・理解、技能の習熟が十分ではないと思われる。

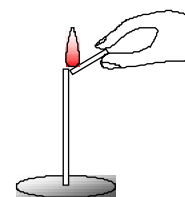
【指導上の改善点】

観察、実験、操作などの数学的活動を取り入れ、立体図形の概念を育てるとともに、身近な図形の考察を通して図形についての見方や考え方を養うことが望まれる。

<数量関係>

9 長さ 22 cm の線香を燃やしたときの時間と残りの線香の長さの関係を調べたら、下の表のようになりました。線香に火をつけてから x 分後の残りの線香の長さを y cm とし、次の各問いに答えなさい。ただし、線香の燃える速さは一定とします。

x (分)	0	(ア)	10	15	...
y (cm)	22	18	(イ)	10	...



問 2 1 分間で、線香は何 cm 短くなりましたか。

$$\frac{4}{5} \text{ cm}$$

正答率	47.8
誤答率	45.2
無答率	7.0

【分析・考察】

正答率は約 5 割である。表の値を読み取り、適切に処理することができていないと思われる。

問 3 y を x の式で表しなさい。

$$y = -\frac{4}{5}x + 22$$

正答率	23.1
誤答率	60.2
無答率	16.6

【分析・考察】

正答率は約 2 割で、無答も多い。これは変化の割合が負の数であったため、関数としてとらえにくかったものと思われる。

問 4 線香が燃え尽きたのは、線香に火をつけてから何分何秒後ですか。

27分30秒後

正答率	33.5
誤答率	50.4
無答率	16.1

【分析・考察】

正答率は約 3 割で、無答も多い。単位換算に習熟していないことがその原因の一つと考えられる。

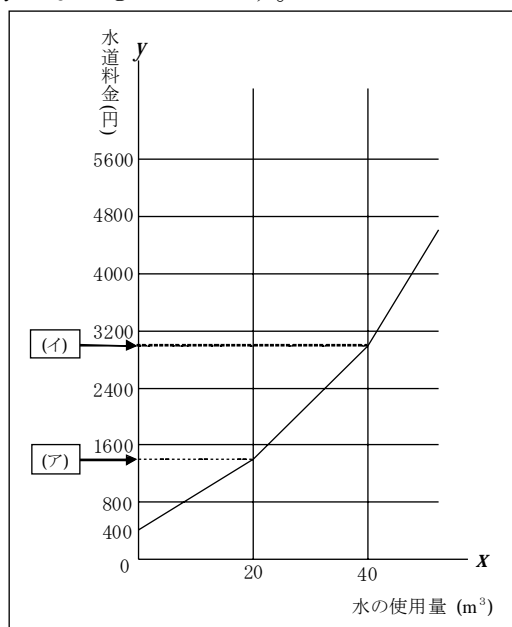
【指導上の改善点】

自動車の燃費や速度、音の伝わる速さ、1 g 当たりの値段等、日常の生活の中の事象を数学的にとらえる習慣を身に付けさせる必要がある。その際、身近なものの量感を体感させる指導が必要である。併せて単位の意味についての指導が望まれる。

<数量関係>

10 太郎さんの町の水道料金(月額)は基本料金(水の使用量に関係なく、必ずかかる料金)と従量料金(水の使用量に対する料金)の合計で、その料金は次の表のようになっています。また、グラフは水の使用量を $x \text{ m}^3$ とし、そのときの水道料金を y 円としたとき、 x と y の関係を示したものです。
次の各問いに答えなさい。ただし、消費税は考えないものとします。

基本料金	400円	
従量料金	0 m^3 以上 20 m^3 まで	1 m^3 あたり 50円
	20 m^3 を超え 40 m^3 まで	1 m^3 あたり 80円
	40 m^3 を超えた場合	1 m^3 あたり 120円



例えば 水の使用量が 24 m^3 の場合
水道料金は

基本料金	400円
従量料金(0~20 m^3 まで)	$50 \times 20 = 1000$ 円
従量料金(20~24 m^3 まで)	$80 \times (24 - 20) = 320$ 円
計	1720円

となります。

問1 グラフの $x=20$ のときの (ア) と $x=40$ のときの (イ) にあてはまる数を答えなさい。

(ア)

1400

正答率	57.4
誤答率	26.2
無答率	16.5

(イ)

3000

正答率	49.8
誤答率	29.4
無答率	20.8

【分析・考察】

グラフだけでは読み取れない値を計算によって求める問題であったこと、さらに、文が長く、整理しながら正確に読み取る力も必要とされる問題であったことなどにより、正答率が低かったものと思われる。

問2 水の使用量が 60 m^3 のときの水道料金はいくらですか。

5400 円

正答率	18.1
誤答率	60.5
無答率	21.4

【分析・考察】

正答率は約2割で、無答も多い。グラフに表れていない部分を計算で求める必要があるが、解法までの手順がわかりにくかったものと思われる。

問3 太郎さんの家の先月の水道料金は2600円から4200円の間でした。水の使用量は何 m^3 から何 m^3 の間だったのでしょうか。

35 m^3 から 50 m^3 の間

完全正答率	14.4
不完全正答率	11.2
誤答率	39.2
無答	35.3

【分析・考察】

完全正答率、不完全正答率ともに約1割で、無答も多い。2つの関数からそれぞれ対応する x の値を求める問題で、グラフを活用した複合的处理能力が要求される。これらのことが正答率が低かった原因と考えられる。

【指導上の改善点】

日常生活の中には数学の題材となるものが数多く存在する。1次関数の単元末に様々な事象を関数としてとらえる課題学習を設定するなどの工夫が必要である。それらの学習を通して、実生活に密着した事象を数学的にとらえ、数学のおもしろさを紹介するとともに、身近な事象の考察に数学を積極的に活用していく態度を養うことが望まれる。

5 中学校英語

(1) 部(領域)別経年比較

部(領域)別正答率経年比較

年度 \ 部	I部 聞くこと	II部 言語材料	III部 読むこと	IV部 書くこと
平成15年度	73.5	49.1	75.2	62.1
平成14年度	85.7	57.2	71.6	56.9
増減	-12.2	-8.1	+3.6	+5.2

平成15年度 部(領域)別平均点一覧

部	配点	平均点	正答率
I部：聞くこと	24	17.6	73.5
II部：言語材料	24	11.8	49.1
III部：読むこと	28	21.1	75.2
IV部：書くこと	24	14.9	62.1
全体平均		65.4	

平成14年度 部(領域)別平均点一覧

部	配点	平均点	正答率
I部：聞くこと	20	17.1	85.7
II部：言語材料	24	13.7	57.2
III部：読むこと	32	22.9	71.6
IV部：書くこと	24	13.7	56.9
全体平均		67.4	

(2) 部(領域)別経年比較分析及び考察

◎ 今年度の平均点 65.4 点は想定平均点 (65~70 点) の範囲内であり、昨年度の平均点 67.4 点より 2.0 点低い。

◎ 部(領域)別では、「聞くこと」「読むこと」の正答率が他の2領域より高く、「書くこと」の正答率が既述の2領域より低い。『語彙や英語の知識』に関する「言語材料」の正答率は、3領域よりかなり低い。これらの傾向は、昨年度も同様である。

部：「聞くこと」について

- 正答率は昨年度より 12.2 ポイント低い (85.7%→73.5%)。今年度は、「基本的な疑問文を聞き取り、適切に応じることができるようになること」を調べる設問を追加したり、より自然な口調で読んだりしたことにより、難易度が昨年度より上がったものと思われる。
- 単語・単文・対話・まとまった文章などの具体的な内容や大切な部分を聞き取ることはできている。一方、複数の情報を整理しながら正しく聞き取ることは十分ではない。

◆ 学習指導要領が重視する「音声によるコミュニケーション能力の育成」を達成するには、「聞くこと」「話すこと」の言語活動の量的なものを増やすことが第一義である。ただし、英語の授業時数を考えると、“シャワー的”な聞き取り練習は難しく、事前に聞き取る内容を示し、取舍選択しながら必要な情報を聞き取ることができる手立てが必要である。

部：「言語材料」について

- 正答率は昨年度より 8.1 ポイント低い (57.2%→49.1%)。「文における基本的な強勢や区切り」「語、連語及び慣用表現」の理解・習熟は、十分とは言えない。
- 記述式設問の平均無答率が 13.0 % と高い。この傾向は、昨年度とほとんど同じである。

◆ 「音声」「語、連語及び慣用表現」及び「文法事項」等の言語材料は、「聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと」の4領域の言語活動を支えるものである。基本的な言語材料の知識・理解が十分でなければ、“実践的コミュニケーション能力”を養うことは難しい。指導に当たっては、教科書で取り扱われる基本的な言語材料に限定する必要がある。その上で、それらの言語材料を、理解の段階にとどめるものとそれを用いて表現できるようになるまでのものとに整理することが重要である。

部：「読むこと」について

- 正答率は昨年度より 3.6 ポイント高い (71.6%→75.2%)。中心となる事柄など大切な部分をとらえて、的確に読み取ることが概ねできている。
- ただし、昨年度と同様に、**10** (3)の完全正答率は 42.2 % と低く、一文一文が意味する内容を正確に読み取ることが不十分である。

◆ 昨年度も言及したように、教科書の読み物資料を効果的に活用するなどして、概要や要点を把握させるなど「読み取ること」を目的とした学習の時間を今後さらに確保することが望まれる。その際、逐語訳的学習に終始するのではなく、スキミング(必要な情報を探すための読み)やスキミング(概要や要点を把握するための読み)と呼ばれる読み方と前後関係を意識させた精読とを明確に使い分けた指導が必要となる。

部：「書くこと」について

- 正答率は昨年度より 5.2 ポイント高い (56.9%→62.1%)。書くことにおける指導及び学習姿勢が改善されてきているためと考えられる。
- ただし、**12** (1)~(4) (条件付き自由英作文) の平均無答率が 13.5 % と高い。この傾向は昨年度と同じで、「話す、書く」の表現活動を一層充実させる必要がある。

◆ 書く能力の育成に当たっては、例えば、『音読させる』→『文を覚えさせる』→『文を書かせる』、『対話文をペアで音読させる』→『対話文を暗唱させる』→『対話文を書かせる』など、音読指導を踏まえた指導プロセスを見直す必要がある。

(3) 正答率の低い設問に関する分析・考察，指導上の改善点

<聞くこと>

1 (1) No. 3 絵を見なさい。これから放送する英文の内容を最もよく表している絵を，それぞれ1～4の中から1つずつ選び，その番号を□の中に書きなさい。英文はそれぞれ2回ずつ読みます。

- 1 「風鈴」の絵
- 2 「バッグ」の絵
- 3 「うちわ」の絵
- 4 「扇子」の絵

4

正答率	7.0
誤答率	92.5
無答	0.5

A : How do you use it?

B : We open and use it on hot days. We can bring it in our bag.

【分析・考察】

日常使われる身の回りの道具の聞き取りについては，約1割の生徒しかできていない。日常的な自然な音声及びスピードであったために，キーワードを十分に聞き取ることができず，複数の情報を整理して理解することができなかつたと思われる。また，正解の「扇子」自体が中学生の日常生活にはあまりなじみがないので，“open and use it”がイメージできなかったことが，正答率が低くなった原因とも考えられる。

【指導上の改善点】

音声に関して，英語では一語一語を切り離して発音せず，複数の語を連続して発音することが多い。特に，音の連続によって生じる音変化に慣れていなければ，聞き取りは困難である。第1学年の初期から「話すこと」や「音読」と関連付けて，意図的，継続的に指導していく必要がある。

また，複数の情報を正しく聞き取る力を育成するためには，ある一定の時間，音声をシャワー的に浴びさせるのが効果的であるが，週3時間の授業ではその時間の確保が困難である。そこで，絵や場面，場合によっては設問をヒントに，先にキーワードを予測させたり，聞きながらメモを取らせたりするなどの指導の工夫が必要である。

さらに，“インフォメーション・ギャップ”などを使って，考えながらQ&Aを行う言語活動を取り入れることも有効である。その中で，疑問詞を使った対話に慣れさせることは，単に「話すこと」の活動を発展させるだけでなく，注意深く相手の質問を「聞くこと」や，推測しながら相手の話を「聞き取ること」，情報を整理しながら理解することにもつながると思われる。

具体的には「身の回りのもの」，「目新しいもの」，「日本の文化的・伝統的なもの」を対話しながら紹介する活動などが考えられる。

指導例 … “Show and Tell” のやり方で，モデルを示してペアでやらせる。

例① A : What is it?

B : It's ~ .

A : How do you use it?

B : We use it ~ .

例② A : Do you often use it?

B : Yes / No.

A : When/Where/How do you use it?

B : We ~ .

<言語材料>

5 (1) 次の対話において、下線部の語でふつう最も強く発音されるものを、それぞれ1～4の中から1つずつ選び、その番号を□の中に書きなさい。

Akiko : How are you?

Susan : I'm fine, thank you.

And how are you?

1 2 3 4

4

正	答	率	30.6
誤	答	率	68.9
無	答		0.5

【分析・考察】

基本的なあいさつにおける強勢については、約7割の生徒ができていない。この設問は、“Classroom English”として使用頻度の高い表現である。にもかかわらず正答率が低い理由として、日常、音声をあまり意識せずに使っていることが第一に考えられる。さらに、最初の問いかけの“How are you?”は“are”に強勢があるので、これと取り違えたということも考えられる。また、日頃“And you?”という省略形を用いているため、“full sentence”に戸惑いを感じた生徒がいたことも考えられる。

【指導上の改善点】

“How about you?”をはじめ、このような「尋ね返す」表現は、会話を広げたり続けたりするために大切なものであり、使用頻度は高い。何気なく使っている省略文の意味を振り返ってみる必要がある。さらに、相手にわかりやすく伝えるという視点で、英語らしい正しい強勢を心掛けさせる必要がある。

強勢に関する指導プロセスとして、短い語句や文については、チャンツで英語のリズムを体感させながら、強勢をつかませることが有効である。基本的には、「音読」指導の際、CDを聞かせる前に状況や場面の中でどこを強く読むかを生徒に問いかけて、強勢について「意識」させ、その後CDを聞かせるなどの方策をとる必要がある。単に「知識」として知っているだけでは本当の理解にはならないので、音読や暗唱などの活動を積極的に、しかも意図的に行わせることが大切である。その際、個人、ペア、グループなどの学習形態を工夫して、点検しながら、そして、短時間で効率よく練習を行わせることがポイントである。

また、“Classroom English”は確実な定着を図る必要がある。そのためには、日常的によく使うことと、簡単な解説や注意を繰り返し行うことが必要である。

<生徒に使わせたい“Classroom English”の表現例>

- ・あいさつ Good morning / afternoon. Have a nice day.
See you tomorrow.
- ・授業中の応答 I can't hear you. Will you say that again? Pardon?
Excuse me. Will you help me? I'm sorry. Let me try.
- ・授業中の活動 Can you join us? I think you are right. Are you OK?
I think so, too. That's a good idea. I don't think so.
Can I ask you a question? How do you say ~ in English?
What do you mean? What does it mean?

<言語材料>

7 (1) 次の対話が自然なものになるように、() 内に入れるのに最もふさわしいものを、それぞれ1～4の中から1つずつ選び、その番号を □ の中に書きなさい。

A : ()

B : Yes. I'm looking for a birthday present for my father.

- 1 May I look at the present?
- 2 May I help you?
- 3 What's this?
- 4 How old are you?

2

正答率	19.2
完全正答率	17.2
誤答率	79.6
無答	1.2

【分析・考察】

買い物の場面での慣用的会話表現の知識を身に付けることについては、約2割の生徒しかできていない。「音声」「語、連語及び慣用表現」及び「文法事項」等の言語材料についての理解・習熟は、十分とは言えない。

例えば、上記の設問の答えとなる“May I help you?”という慣用的会話表現は各教科書や授業で頻繁に取り扱われる表現であるにもかかわらず、正答率が2割に満たないという状況である。

理由として、以下の3点が考えられる。

- ① “may”や“help”等の単語の意味が十分には理解できていない。
- ② “May I help you?”という慣用表現としての意味が十分には理解できていない。
- ③ “May I help you?”という慣用表現としての意味は概ね理解できているが、対話や文脈での理解が不十分か、使い方が分からない。

自校の生徒一人一人のつまずきが、①～③のどの段階でのつまずきであるのかを分析し、各段階での定着のための方策(“ストラテジー”)を見直す必要がある。

【指導上の改善点】

「語、連語及び慣用表現」等の言語材料と「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと」の4領域の言語学習には、主に以下の二つのサイクルが考えられる。

一つは、<予習>→(疑問)→[授業]→(定着)→<復習>の『習得型学習サイクル』であり、もう一つは、[授業]→(触発)→<追求>→[授業]→<表現>→(共有)の『探求型学習サイクル』である。

【分析・考察】の①や②の段階でのつまずきを抱えている生徒については、『習得型学習サイクル』を踏まえた方策を考える必要がある。例えば、学習した次の時間に単純な「単語・表現確認小テスト」などを実施することが効果的である。その際、定着率の低い生徒には、再(再々)テストなどを実施し、“繰り返し”という考え方で指導することが重要である。

一方、③の段階でつまずいている生徒には、『探求型学習サイクル』を踏まえた方策を考える必要がある。例えば、その慣用表現が使われる場面を数多く設定し、一つだけではなく複数での理解を図り、その後、実際にいくつかの場面で「使う」ことを体験させることが必要である。その際、「その表現を使ってみよう」という発表者の“意識”とその発表内容をクラスで共有することが重要な要素となる。

『習得型学習サイクル』と『探求型学習サイクル』とをバランスよくリンクさせたり、組み合わせたりすることで言語材料の定着率が高まると考えられる。

<書くこと>

- 12 あなたは転校先（イギリスのある中学校）で自己紹介をすることになりました。下のメモの内容について、あなた自身のことを正しく伝えるための英文を 中の(1)～(4)に書きなさい
ただし、それぞれの文は単語を3語以上使って書くこと。

メモ (1) 年齢 (2) 出身国 (3) 好きなものやこと (4) 将来したいこと

Hi, friends. My name is ○○ ○○. (例-Nagasaki Taro)

- (1) 年齢について (※数字は算用数字で書くこと。 例-13, 14, 15など)
I am 14 (years old).
- (2) 出身国について
I am from Nagasaki, Japan.
- (3) 好きなものやことについて
I like to play sports.
- (4) 将来したいこと (仕事, 夢, 行ってみたい国 など) について
I want to be a baseball player.

Thank you very much.

	(1)	(2)	(3)	(4)
正 答 率	54.8	66.1	78.9	55.6
完 全 正 答 率	40.5	50.0	49.4	30.6
不 完 全 正 答 率	14.3	16.1	29.5	25.0
誤 答 率	28.2	24.6	11.9	25.9
無 答	17.0	9.3	9.2	18.6

【分析・考察】

四つの問題の平均正答率は 63.9 %である。基本的な語、慣用表現及び文型、文法事項を活用して、自分自身のことを書いて表現することについては、約6割の生徒ができていた。ただし、平均無答率は 13.5 %である。

自分のことを書いて表現する意欲はあるが、英語による基本的な文の組み立て方を踏まえた表現力（書く能力）の定着については、まだ十分とは言えない。

【指導上の改善点】

表現力（書くこと）の定着を図るためには、以下の二つの内容を考える必要がある。

- ① 書くために必要な基本的な表現（「基本文型」）が定着していない場合
➔ 教科書の各レッスンやユニットで取り扱われる POINT や KEY SENTENCE 等を計画的・継続的に活用して、基本文型の確実な定着に努める必要がある。
- ② キーとなる一文は書けるが、前後や構成を踏まえて書くまでには到達していない場合
➔ 最終的には、ある主題について自分のことや考えを相手に伝えるように書くことが求められるので、小さなステップを踏ませながら、『構成』を指導する必要がある。